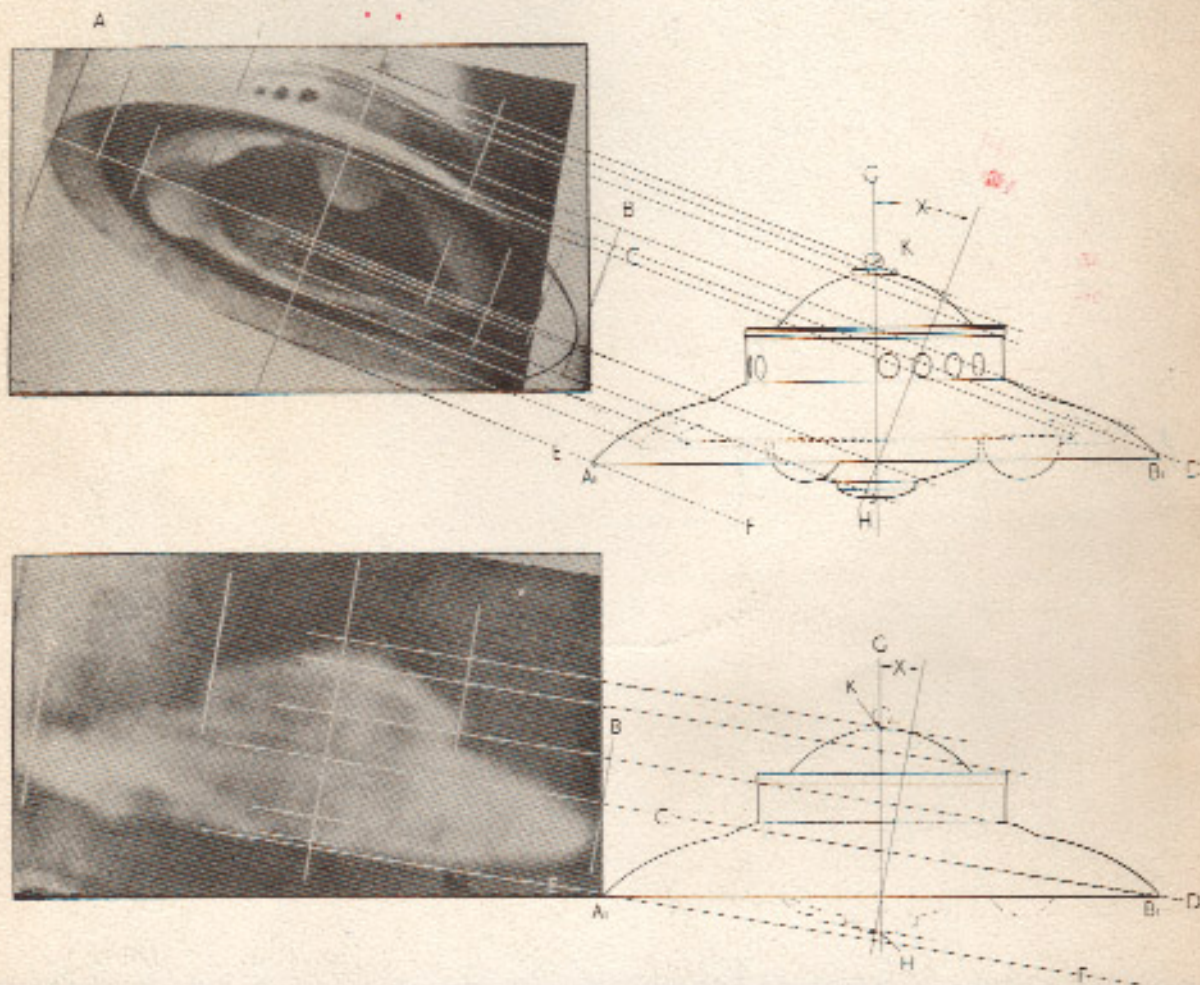


UFOと宇宙哲学の研究誌

GAPニュースレター

54



GAPニューズレター第54号目次

UFOの秘密(1)	フランク・スカリー	1
生きるための助言(6)	J.クリシュナムルティ	12
慈悲は法則を完成させる	久保田八郎	20
ジョージ・アダムスキーの思い出……ルウ・チンシュターク		26
〈改訳〉空飛ぶ円盤同乗記(7)…… G.アダムスキー		30
「声」		38
昭和48年度日本GAP総会盛況 会场上空にUFOの編隊が出現!		42
私は総会々場からUFOを見た! 清水畑博/安田正人		45
日本GAP会員、各地でUFO資料展を開催……		49
わが国唯一のUFO専門誌コスモ第5号発売……		50
月例研究会案内……		51
編集後記……		53



★ GAPとは

GAPは「知らせる運動」という意味の世界的なグループ活動で、世界中の人々が空飛ぶ円盤の真相について「知る」機会を与えられるべきであるという見地に基ずいて1959年にジョージ・アダムスキーによって創始されました。彼の願いは「最大多数の人が現代の真実を発見して、来たるべき時代に眼を転じること、人間はすべて「コスミック・パワー」の御子であり、そのパワーの諸法則が宇宙に遍満している事実を確信をもって知ること」にありました。この諸法則は他の世界(惑星)から来る友好的な訪問者からもたらされた「生命の科学」の研究と理解を通じて体得できるものです。

日本GAPの目的は円盤とスペースブラザーズ問題に関心ある人々に伝えることにあり、奉仕活動を通じて真実の解明と宇宙の法則の実践を呼びかけることにあります。その中心思想は次のとおりです。

1. この太陽系の他の惑星群から偉大な発達をとげた人類が地球を訪問しつつある。
2. 他の世界から来る人々はこの世界の政治家や科学者とひそかにコンタクト(接触)しており、危機にひんした地球に対して救援の手をさしのべている。官民を問わずスペースブラザーズとコンタクトしている人々が少数存在すると思われるが、通常その真相は洩らされていない。
3. ジョージ・アダムスキーがもたらした哲学は、人類の起源と未来の運命の真実を知るのに有益である。

本誌は他の団体・個人と対立するものではなく、政治・宗教と関係のない非営利刊行物です。本誌が読者に対して多少とも役立てば幸いです。

◎GAP参加グループを有する国は次のとおりです。

アメリカ、オーストラリア、ベルギー、ブラジル、カナダ、デンマーク、イングランド、フィンランド、ドイツ、オランダ、インドネシア、日本、メキシコ、ノルウェー、スウェーデン、スイス(ABCの順。1971年6月現在)

★本誌掲載記事の内、海外関係のものは翻訳転載権取得済。
写真共禁無断転載。

★表紙写真はステイブ・ダービシャー少年撮影のコンiston円盤(下)とアダムスキー撮影の円盤とを英国のレナード・クランプが正射影法によって比較した図。両円盤共同一物体たる事を証明した。

UFOの秘密 (1)



フランク・スカリー

本号よりフランク・スカリーの Behind The Flying Saucers を「UFOの秘密」と題して連載することになりました。これは実に今を去る二十四年前の一九五〇年に出版された米国UFO研究界の裏面史ですが、一般から猛烈な批判と攻撃を受け、ねつ造記事のらく印を押されて研究界から完全に抹殺されて以来絶版になっているまほろしの書です。しかるに編者が海外から入手した信頼すべき情報によれば、この書は事実の記録であり、円盤研究史上貴重な文献であるということです。いかなる事情のもとに葬り去られたのかはさだかでありませぬが、UFOの知られざる一面を公にした稀こう本として一読にあたいすると考え、ここに訳出を試みました。本邦初公開と思われるこの驚くべきドキュメントが会員諸兄姉にひ益するところあれば幸いです。なお本書の入手に関して有益な助言をたまわった静岡県天竜市のユ一ホロジストクラブ主宰者平野泰敏氏、原書のコピーをこころよく提供された東京の日本宇宙現象研究会主宰者並木伸一郎氏、そして情報を寄せられた海外の某氏に深く感謝する次第です。

編者

なお本文中に(注)とあるのは編者によるものです。

目次

1	デンバー大学のミステリー	2	その科学者は何を言ったか
3	ある個人の履歴	4	衝突の学説
5	月の外縁	6	山師たちと円盤
7	空軍の報告	8	要塞から破滅へ
9	更にふえた出版者たち	10	天文学者連がそれを見るとき
11	航空力学上の修正	12	空飛ぶ円盤の内部
13	天然磁石からアインシュタインへ	14	磁気に関する定義
15	なぜ円盤は地球へ着陸したか	16	質問箱
17	どのようにでも解釈のつく結論		補遺

序

今日（注一 一九四〇年代のこと）一般大衆と政府間には二重の道德基準がある。科学から縁遠いもの、すなわち機密という線にそって、治安よりも恐怖を生み出すものは、文句なしに軍事防衛の枠内に入れられてしまった。われわれが何か異常な物、空中にさえも異常な物を見ると、人民執行委員（注二 ソ連の大臣に相当）を見たロシヤの農民みたいに口を閉じるか、または氏名・住所・職業・証言などを、名を明かさぬ情報将校に告げて調べられねばならない。

多くの日から恐怖の念をもってみられているこの名を明かさぬ「生物」は、こちらのいうことを否定したり嘲笑したり、ときには「——こういう国がふえているのだが——」こちらのいうことをネタにして投獄したりする。こちらの発言のタイミングがその問題に対する彼らの公式声明の出された時点と合わない場合は特にそうである。

共産主義者が自分らの神を作り上げたように、われわれも自国の姿なきスポークスマンを神聖視し始めている。このいずれも言論の抑圧者であるから自由人は闘わねばならない。

このことは今あまり追求しないが、とにかくこれはすべて既成宗教の信仰の喪失にもつながっていて、そのため人々は新理想化運動に走るようになったのである。

自由人が、個人の自由な研究に対するこうした侵害と闘う唯一の方法は、前もって次のようにいうことだ。「私が話すことは否定されるだろう」または「これは真実なのだが、今そんなことをいう者は夢想家のらく印を押されるか、それともしつこく主張すればウソつきにされるだろ

う」

大衆の権利をうばってしまった検閲官という敵チームが自分らに都合のよいレフェリーによって、こちらが広い競技場で存分に走りまわっているのとみるや、防衛戦でラビットパンチ（注三 ボクシング用語。後頭部のえり首への短く鋭い打撃）をあびせかけて不具にしたり、こちらがほぼ確実にフィールドゴール（注四 フットボール用語。フィールドからのキックによる得点）を入れかけたとみると、空中高く上がったボールを機関銃で撃つたりするならば、アメリカのスポーツマンシップの基準は完全に破壊されるのである。

このような機構のもので、やることの一つだけある。相手の策略を暴露することだ。この世界がぼんやりと考えているよりもっと多くの攻撃が「防衛」の名のもとで行なわれていることを示してやることだ。こちらのいうことが全くの真実で、相手のいうことが全くの真実でないことを主張し続けるのだ。

これはわれわれの肉親、すなわち戦争用に訓練されてきて平和時にはスパイや逆スパイなどの役割を与えられた息子たちと話し合う場合、恐ろしいやり方に思えるかもしれない。しかし制服を着た息子たちは大衆に報告しないで中央情報部へ報告するからには（われわれの知る限り、情報部はだれにも知らせないし、だれにも答えない）、現下の発見事を一体どうやって友人たちに知らせればよいのか。

科学者は他のいかなる階層よりも戦後の忠誠ノイローゼで苦しめられてきた。しかし文筆家といえども科学者のずつとうしろに隠れることはできない。米国の歴史をつらぬいている「狭量」という系は、今やわれわれを縛り首にする輪ナワほどに太くなっている。このような状況下で「嘲笑されるだろう」と意識するばかりでなく、「だれが嘲笑するか」

を知りながら、しかも逆襲を覚悟の上で書物を書くことは、考えられないほど困難なことである。

われわれは狂人なのだといはつきりとした内部意識によってほんとうの狂人になってしまふよりもむしろ先頭に進み出て、米国のあらゆる官僚は無能な日より見主義者であり、公務員の給料にしがみついでいて、やがて年金をもらうか、私企業の、もったいぶっているがくだらぬ人間のするような仕事にありつく（この私企業には個人の寄付などで成り立っている大学も当然含まれる）連中であり、おまけに「真実」の刈り込み人なのだといつてやる方がよほどスマートである。

この失われた自由を取り返すためには「くたばれ、上下両院！」と叫び、「極秘」「機密」「専用」「治安上公開せず」などとスポークスマンがいう言葉の裏にひそむ絶えまのない策略でごまかされないようにしなくてはならぬ。

このようなごまかしのあとには大抵いつも別な軍事部門から声明が出される。いわく「われわれが隠している物事は実際には隠すにあたいたくないものだ」「われわれは古い時代遅れの軍備で守られているのだ」そして最後には「新式の軍備をするために十億ドルの追加予算を認めないと、われわれは死んだアヒルになる。円盤どころではない！」とくる。

プロパガンダ（注||主義主張の宣伝）というものは真実でもあったしウソでもあった。実際、もしスポークスマンが情報部のために尽くしているとするれば、もはや彼の内部に真実はないといつてよいだろう。スパイは単なる熟練でもってウソを売買することはできない。もしできるとすれば、なぜスパイは世界中で逮捕されたり、大抵十五年の判決を受けたりするのか。それは国際的レベルで公正取引の策略行為になったのか。この陰気な壁紙模様の例を二、三あげれば読者にはもっと明瞭になるだ

ろう。

一九四七年六月二十四日、自家用機で飛んだアイダホ州ボイスの実業家ケネス・アーノルドは、ワシントン州レイニア山地帯で数個の空飛ぶ円盤を見たと初めて報告した。そしてこのあと別な目撃報告が続くようになる。

ところが八月九日に第四航空師団の副官ドナルド・スプリングガー中佐は、このナンセンスな報告類をやめさせることにしたのである。しかし彼の命令にもかかわらずモリー島に落下したといわれる溶けた金属に關して、どうしようもない不可解なナゾが残っていたし、しかも詳細な調査をするためにその金属を輸送していた二名の軍パイロットが死んだにもかかわらず、「タコマ地域だろうが」「どこだろうが」「空飛ぶ円盤を信ずべき根拠はない」と中佐は言明したのである。

各新聞はこれを何かの暗示と解釈して、この問題に關しては沈黙してしまった。その結果はどうなったか？ 一九四八年一月までに、すなわちスプリングガー中佐のキャン口令から六カ月後、ペンタゴン（注||米国防省）はそれまでに寄せられていた数百の目撃報告を調査するために「プロジェクト・ソーサー」（注||円盤調査機関名）を設立した。フェルト誌は第一号のほぼ半分を円盤問題の記事にして、「私は空飛ぶ円盤を見た」と題するケネス・アーノルドの手記を巻頭に飾った。

プロジェクト・ソーサーは予備報告を出すまでの一年半のあいだ、冷静な態度で仕事を進めていった。サテデー・イヴニング・ポスト誌は、どうやらその報告が否定的な内容になりそうだと知っていることを知っていたので、空軍の報告とほとんど同時にシドニー・シャレットに二つの円盤記事を書かせたのである。ところが結局その記事は各種円盤事件の要点のくどくどしいくり返しとなり、それを読んだ一般人は、円盤の存在を

信ずる者はバカだという印象を受けたのだ。

シャレットの最初の記事は四月三十日号のポスト誌に載り、二度目は五月七日号に載っている。四月三十日号はもちろん同日よりも数日前に店頭に出た。実際は空軍が四月二十七日に予備報告を出したときに発売されたのである。空軍の報告はポスト誌を妨害したのだ。これは前述のように同じ問題を扱う執筆者をバカにしてかかるやり方に沿っている。しかしその公式報告はスプリングガー中佐やポスト誌の言い分には何も触れないで、結局円盤ストーリーには何かがあると判断していた。しかも円盤は別な感屋から来るのかもしれないという考え方すら含んでいた。そして多くの円盤事件を不可解のままに残した上、後日これらの事件にもっと光をあてようと約束したのである。

こうしてポスト誌を否定的な方向への「尖兵」になるようにおびき寄せた空軍は、自分たちこそ肯定的であるかのように目立たせ続けていった。このことは当然のことながら一つの新しい傾向を見たライバル編集者たちにドーアが開かれた。トゥルー誌はポスト誌の面目失墜を金で買えると考えた。同誌の編集陣はフェート誌やポスト誌が持っていた資料を集めて、またその問題をとり上げたのである。ただし空飛ぶ円盤の信者すべてに疑惑を投げかけるかわりに、トゥルー誌は一九四八年の春フェート誌が確立した古い境界線に従って、一九四九年十一月に「空飛ぶ円盤は実在する」と宣言した。ところが――

トゥルー誌が書店に現われるや否や空軍は同誌の見解を徹頭徹尾否定した。同年十二月二十七日に空軍のスポークスマンはプロシエクト・ンサーは中止されたと声明し、円盤の信者を狂人か山師ときめつけた。そしてトゥルー誌や他の者を逃げられないようにしたのである。

円盤に対する空軍の見解に同調した、または反対した人々を、宇頂天

にさせたり意気消沈させたりするこの権謀術教的やり方はその後も続き、かりに真実のすべてが現われても、このやり方は変えられそうにもなかった。その常套手段は「われわれとボール投げをして遊ばないか。そうすれば両眼のあいだに球を打ち込んでやる」にあるらしい。

本書に関して軍部が何をいうか、いわないかは、私にはほとんど関心はないが、読者には私の見解を理解していただきたい。私はまだ全然空飛ぶ円盤を見たことはないし、見たという幻覚を起こしたこともなければ、円盤問題に関する大衆の騒ぎに加わったこともない。また私の知識と信念による限り、円盤に関するインチキ行為に加わったこともない。

しかし円盤を見たのみならずそれを研究しているという科学者たちに話したことはある。そして彼らの話に欠点を見出そうと精一杯の努力をした。だが今日まで空軍のしいた三つのカテゴリーのいずれにも彼らを入れることはできなかった。

科学者はこの問題で軍と闘うつもりはない。彼らは研究用の重要な資料を得なければならぬのだ。しかし国防省の一部は、同調しようとしていない科学者が重要な資料を見つくるのを困難にさせるかもしれない。科学者たちは自分の主張を他人に理解させることができるだろうか？

よって、軍の公式声明なるものを風に吹き飛ばされる新聞紙と同じほどこに無視せよと私が読者に忠告してもおかしくはない。

実際のところ面目を失った人々が「問題は新聞である」とか「新聞ではなくて円盤のカケラである」といったところで信じられることにはならないだろう。それは、われわれ大衆が、住所氏名を持ち、信念のこもった勇氣を持つわれわれが、円盤のような物体は存在すると発言して初めてそれは真実となるのである。しかも長いあいだそのように発言してきたのだ。

さあ、気楽に本書を読みたい。そしてこれから先に出されるペンタゴンの否定のすべてを「無視」という火の中に投げ込まれたい。

一九五〇年 戦没将兵記念日に

フランク・スカリー

デンバー大学のミステリー ● 第一章

二十世紀の後半にはいったとき、三つの出来事が異常なニュースとして脚光をあびるようになった。その内の二つはニューヨークタイムズ紙の目を引かなかつたが、当時ほとんどだれの関心のならなかつた三番目が、他のすべての新聞と同様にこの大新聞の数カ月にわたるトップ記事となつたのである。

ニューヨークタイムズにとってニュース価値のなかつた二つとは、米本土中に空飛ぶ円盤が出現するという多数の報告と、イングリッド・バグマンの赤ん坊がイタリアで生まれたというニュースである（注||バグマンはスエーデン生まれの往年のハリウッド大女優。「カサブランカ」^た「誰がために鐘は鳴る」等^有有名）。

三番目の事件というのは、まだ恐るべき魔物として立証されていなかつた。実現させるようにと期待されていた科学者の多くは、それが完成しても作動するかどうかに確信がもてなかつた。これこそ水素爆弾なのである。だが例外なしに新聞にとっては、この変形爆弾は既成事実だつ

た。

一九五〇年の春に生きていたあらゆる人々にとって、この水爆という怪物がすでに実在していたと信ずることはむづかしいが、一方、大衆にとっては地上のものにせよ別な所から来るものにせよ、空飛ぶ円盤には夢があつた。

ヒロシマに投下された原爆の五十倍もの人間を殺すと考えられるこの爆弾は、製造中からもちろんニュースだねとなつていた。しかし一九五〇年には、大気中に出現したり、たぶん地上に着陸するとも思われる円盤に関する多くの話ほどには現実味がなくなつたのである。

こうした円盤事件の話がもし真実となれば、この世界の創造以来かつてないほどの大事件の一つといつてよいだろう。もし選択をする必要があつた場合、超過支出または他国に対する武器貸与、または国民の汗で切り抜けている国の政府ならば、この世界に対する人間の知識や理解に何ら新しい貢献をしない爆弾の製造に同じ額の金をついやすよりも、宇宙船の建造に数百万ドルの予算を組むよう決定するだろう。

しかるにこうした選択が与えられた少なくともある一国の政府は、控え目の予算で二年間の調査をやつたあげく、プロジェクト・ソーサーを解散させて、その空軍はUFOのほとんどの報告を次の三つのどれかにしてしまつたのである。

- 1 地上の種々の物体の誤認
- 2 群集ヒステリーの弱い形
- 3 インチキ

空軍の「正体不明」のスポークスマンは、プロジェクトが二年前にオハイオ州デイトンのライトバタースン空軍基地に設立されていたと簡単に説明した。ここは空軍資材司令部である。

「そのとき（一九四八年一月）以来、三百七十五例が報告され調査された」とレポートは結んでいる。「補助特別調査員は大学や政府関係の科学コンサルタント（複数）であった」

この調査員やコンサルタント、大学などの名はあげていない。実際、その短期間での解散と六カ月に及ぶかなり長いレポートとのあいだには、三百七十五例の内、三十四例が未解決のままになっていたが、その三十四例のミステリーは全然何の説明もつけられずに「閉店」となったのである。かりに何らかの解決があったとしても、それらは軍部以外のすべての人には極秘にされたことだろう。

しかるにプロジェクト・ソーサーの最後の発表が公開されるや否や、円盤に関する一連の報告が西側世界のあらゆる場所から新聞を目標に始めた。政府のプロジェクトが中止されたとき、こうした報告の「配達人」は地方の新聞以外に行く所がなかったのである。

新聞社と、二年にわたる空軍の公式調査機関中に円盤事件を無視した国防省のあいだには和親協定があった。しかし空軍が手を引いたとき、水門が開いたのである。新聞社によつては円盤問題をクズカゴの中に投げ込み続けたのもあったし、また読者の報告や関心のしつこい弾幕のもとで屈したのもあった。復活祭の頃までにはあらゆるラジオ解説者、あらゆるコメディアン、あらゆる議員などが、そしてニューヨークタイムズまでがいいたことをいいた。

ウォルター・ウィンチェル（注II当時の高名な新聞記者）が最初に口火を切つて、UFOはソ連から来ると確言した。ヘンリー・J・テラー（注IIジャーナリストで駐スイス大使）は二度も発言して、彼の解釈によれば円盤はアメリカのものでソ連のものではない、という。彼はラジオに出演して、自分が今やっている円盤の確実性に関する念入りな解説

は円盤問題の半分しか述べておらず、あとは空軍から発表されれば今夜のいいニュースになるだろうといった。デービッド・ローレンスは自分が出しているUSニュース・アンド・ワールド・レポートのあらゆる威信を円盤実在信者のうしろへかくして、「円盤はヘリコプターと急スピードのジェット機の組み合わせによる革命的なタイプの飛行機だ」と述べたのである。大統領でさえも円盤問題を吹き払うためにキーウエストの避暑地から引き上げねばならぬ始末であった。エリノア・ルーズベルト（注IIルーズベルト大統領夫人）はシカゴ・アンド・サザン・エアラインズのベテランパイロット、ジャック・アダムズ機長とG・W・アンダーソン一等操縦士にインタビューしていた。この二人は自分たちがアークソール上空で見た円盤のことを報告したのだが、それは他の惑星から来るのではなく、秘密のテスト機で、ジェット推進機でもない主張した。フルトン・ルイス二世（注IIニュース解説者）も円盤について自分の見解を発表した。ボブ・ホープ、レッド・スケルトン、ファイバー・マギー・アンド・モリー、エドガー・バーゲン、チャリー・マッカーシー、アモス・アンド・アンディー、それにもろんジャック・ベニーも円盤問題を嘲笑のタネにした。ジミー・ドゥーラントを含むあらゆる人が行動にはいったのである。（注II以上の人名は一九四〇年代に米國で活躍したコメディアンやラジオ・エンターテイナーたちである）

しかし真実の内幕は彼らすべてによって失われていたのだ。

それは一九五〇年三月八日にコロラド州デンバーで発生した。その日の午後十二時三十分デンバー大学の三百五十名の学生は、昼食を抜かして或る内密の科学講演を聴いたのである。この講演は後に新聞が「正体不明の中年の講師」と述べた人によって行なわれたのだ。

この男はガリレオが「それは動いている！」と行って以来、この地球または他の惑星に関して最もセンセーショナルなと思われる講演をやったのである。彼は話している場所から五百マイル以内に着陸したという一機の円盤の真相についてすべてを語り、しかもその宇宙船と乗員についてきわめて詳細に話したため、学生や職員たちは頭をひねりながら教室を出て行った。

しかし人間のゆがめられた好奇心は大きいので、その講演者がだれであるかということが講演の内容よりも大きな関心の的になり始めた。この人間は学生たちによって最初に解決されねばならないミステリーとなつてしまつた。

数時間後に、この講演者はコロラド州デンバー市に住むジョージ・T・キラーというロッキーマウンテンの一員に付き添われていたことが一同の頭に浮かんで来た。その局のコールレターはKMYRである。講演に出席した教職員の話によると、キラーは講演者の名前をだれにも全然紹介しなかつたという。しかし講演者があとで私に説明したところによると、講演者の匿名を守る役目の教授はたしかに本人の氏名を知っていたそうである。

その講演の本題が始まる前に話し手は説明して、ある氏名、日付、場所などを省略する必要があること、またそれらについて質問してはならないことなどを述べた。これは科学者のなかには治安計画に参加している人があり、そのため個人的に調査が行なわれている円盤問題について話せる自由がないからだという。その言葉とともに教授連もノートブックを取り出した。

講演者は用意周到な言葉を用い、時間のとり工合を心得ている教授みたいな話し方をしたので、なぐり書きしていた学生たちも最初の頁のめ

くりで落伍するようなことはなかつた。彼は意外な事実を一定の間隔をおいて話したので、講演の終わったときは大多数の人が「驚異的なことだ」「センセーショナルだ」「口もきけないほどだ」「まったく感動した」といい、「バカらしい」「信じられない」といったのは少数であつた。

五十分ほどかかったその講演については、実数で約四十パーセントの聴講者が不思議がっていた。もともとこの講演は世間に公表しないという条件で科学の基礎クラスの学生のために準備されたものである。だが最初は九十名だったものが、次第にうわさが広がって教室一杯になってゆき、天文学や工学の教授・学生がつめ込んだため、立すいの余地もなくなつたのである。

教職員側と講演者の事前の交渉は数カ月続いている。これは講演者が高く評価されることを望まず、むしろ科学クラスの学生たちが講演を聴くことに百パーセント同意したために、本人が承諾したのである。この学生たちの内八十パーセントは講演が終わつたあとで「非常に感動した」といつている。手を上げさせることによって、六十パーセントはその講演者の話が真実で、まったくありそうなおどろきだが他の惑星から来てこの地球に着陸した宇宙船を調査している科学者の一団——と彼が述べた——の一人であるらしいと答えたのである。しかも学生たちはこの正体不明の科学者が空飛ぶ円盤の推進力の秘密に対して最上の解答をもつており、それは内燃機関でも噴射推進機関でもないと思つたのだ。

更に後に行なわれたアンケートでは、この驚くべき講演の学生信者が六十パーセントから五十パーセントにへつたことを示した。

それでもこの数字は円盤に対する全国的な信者の数よりもかなり高いのだ。ユナイテッドプレス社が行なつた全国的な調査によれば、四人の

内一人は円盤が宇宙船だと信じている（注）ただしこれは一九五〇年の上半期に行なわれた調査である。たしかに米国民の二十六パーセントは円盤は宇宙船だと信じていたし、八パーセントはよくわからないと答えていた。それ以外の者は円盤は幻覚、大衆ヒステリー、インチキだという空軍のスポークスマンに同調していた。これら回答者の中には、あの講演者の話は少なくとも非常に立派だったと考えているデンバー大学の教授陣も含まれているし、また、一大学の名声を利用して行なわれたインチキではないかと考えている人も含まれるだろう。しかしその正体不明の講演者は、アインシュタイン、オッペンハイマー、ブッシュらが同じような懐疑的な聴衆に同じようなセンセーショナルな事実を伝える立場におかれたとすれば、おそらく同じように話したと思われるほどに巧みに、控え目に、科学的に話したのである。

この不思議な科学者が十五分間質問攻めにあつたあと、ジョージ・キラーは叫んだ。「偉大なスコット！ われわれはもうここから出なくちゃいけない。飛行機に乗るまでにあと二十分しかありませんよ！」この声を聞いた講演者とキラーの二人は急いで建物から出て馬力のある車に乗り込み、走り去った。

宇宙旅行に関する講演は大変な連鎖反応を起こしたので、一時間以内には教授団、学生、新聞記者、ラジオ解説者たちのあいだで上を下への大騒ぎとなり、二時間以内には今度は彼らが空軍情報部係官から質問されることになった。

この係官たちが最初に知ったがったのは「講演した人の名は何というのか」である。しかしだれも全然知らない。一人の一年生が、講演者とキラーが去って行く直前に「偉大なスコット」と呼ばれたことを思い出した。一人の教授は講演者が「シアーズさん」と紹介されて本人から

訂正されたことを思い出したが、教授は男が自分の名を何と云ったかは記憶していない。

「あの人はずニートン」または「ニートンの友達」といったと思います」

「デンバー市長のことかね？」

「いいえ、デンバー市長でないことはみんなが確信していました」

「あんたは一体一人の男が名前を全然知らないでデンバー大学で講演できるのですか？」と軍人が尋ねる。

教授はまったくそんなつもりでいったのではない。当然のことながら国家に対する忠誠、反国家主義者狩り、大学の自由をうばおうとしている治安上のタブーなどを前にしてそんなことがいえるわけはなく、むしろあの男がキラーに護衛されていて、結局男は人類が数百年間考えてきた空想的な問題について人に害を与えることなく話したにすぎないといったのである。

「書を与えることなく？」と軍人はくり返して「そんな問題が書を与えないことをどうして知っているのかね？ だれか彼の車のナンバーを覚えているか？ それともどこのホテルへ行くのか立ち聞きした者がいるか？」

すると一人の聴講者が、講演者は二十分したら飛行機に乗らねばならないとキラーがいったことを思い出した。

「彼はどこかへ行くといったのか？」

「いいえ、でもキラーは知っていたのでしょ？」

「おお、キラー！」と係官は顔をしかめて叫んだ。

なぜ顔をしかめたか？ どうやら数カ月間空軍情報部ばかりか編集者までが——大見出しで「空飛ぶ円盤は実在する」と声明したために危険

なフチに立つことになったトゥルー誌の発行人ケン・パーディーから、キャンザス・シティータイムズの無名記者に至るまで——円盤に関する詳細な点についてキーラーを質問攻めにしてきたからである。ところが実際のところキーラーは直仕入れの情報を何も持っていないと彼らに語ったのだ。パーディーはドナルド・キーホー（注II退役軍人で著名な円盤研究者）をワシントンからデンバーへ急行させて、事の真相をつかませようとした。金は問題ではない。だがキーラーはやはり直仕入れの情報を持たないという。そこで怒った一同は本を彼に投げつけた。それまでキーラーに会ったことのないキャンザス・シティーの記者は彼を「スキの刃」とののしった上、みんなインチキだといった。やはりキーラーに会ったことのないAPの一記者も失敗をくり返した。キーホーもどたばたしながら彼を捕えたが、やはりだめだった。キーラーはこの場にふさわしくない名前を用いて彼らを呼んだ。これは現代の小説ではないからだ。

だれも彼を信じようとはせず、特に空軍情報部はまったく相手にしなかった。かつては情報部員たちが、キーラーはアメリカの大砂漠のどこかに着陸したといわれる円盤のキャビンにパイプラインを突込んでいる（注IIキーラーがコンタクトティーであるの意）と信じ切っているかのように行動したし、その円盤たるや土産物探し屋の軍部によって追い払われたともいわれていたのだ。軍部は情報を探していたのか、それとも軍部が持っているのと同じ情報を持っている人のすべてを押さえつけようとしていたのか。軍部自体が行なっていた宇宙船の実験が洩れるのを恐れたのか。それとも円盤はクレムリンの裏面からブーメランのように投げ返されていたのか？

一 大学という湯わかしの中のこのアラシが起る数カ月前に空軍は、

一九四八年一月にオハイオ州デイトンにあるライト基地で設立されたプロジェクト・ソーサーは一九四九年末までに閉鎖を命じられていたと声明した。しかも、一九四九年四月に公表された予備報告は、アイダホ州ボイスの一実業家が（注IIケネス・アーノルド）一九四七年の夏に自家用機で飛んでいたとき九個の円盤型物体が推定できぬほどの速度で空を飛んでいたと報告して以来、三百七十五の目撃例の内、三百四十一例をボツにしまったことを忘れてはならない。

残る三十四例についても空軍の係官は満足すべき解答を見出せなかった。表面上彼らはこの三十四例をインチキ、幻覚、新聞の見出しに自分の名前を出したがっている人の策略などのせいだといえなかった。それにもかかわらず、この未解決のミステリーに対して空軍は一九四九年の十二月末にプロジェクトが解散して、調査員たちによれば円盤は神話であり、それを信ずるのは群集ヒステリーの一つであると説明したのである。

このすさまじいスピードで空中を飛ぶ不思議な円盤型物体について空軍はファイルに入れなかったにもかかわらず、見なれない物体を新聞社へ報告した人々は、その後結局軍部のスパイのワナにかかっていたことに気づいた。事情を知っている新聞記者や他の人々はプロジェクト・ソーサーが解散したという説をあざ笑ったのである。なかには公然とその嘲笑ぶりを新聞にのせたものもある。ベンタゴンは円盤調査が地下活動に変わり、別な名称でまだ行なわれていることを否定しなかった。

キーラーという人はある逆スパイ組織と小ぜり合いをしていた多くの一般市民の一人だったのである。しかしラジオの売れ行きを助ける側にはいる以前の彼はシカゴ・ベアーズのプロ・フットボール選手であったことから、逆パンチを与えることなしに引き下がるような人ではない。

円盤関係の資料を集めるために一人の陸軍調査官がKMYR局へやって来たとき、キラーは二人の会話をひそかに録音しようときめたのである。

その後別な調査官が「ハッシュ・ハッシュ・オペレーション（注：沈黙作戦）」を行なうために訪れたとき——この作戦はプロジェクト・ソナーに取ってかわったものらしい——、ただちに降伏せよと命令されたキラーは驚いた。「われわれはあんたがこのインタビュアーをこっそり録音していることを知っているんだ。テープを渡さない」と調査官がいう。

スキをつかれたキラーは、会社の所有物を他人に渡すにはまず経営者に相談しなければならないと答えた。

「どうしても治安上の——治安とはマジック・ワードだ——の理由でというのなら」と社長は同意した。

キラーは相談の席を離れてから、技師にテープを巻きもとさせねばならぬと説明した。政府官吏のでたらめな話をうまく処理する方法を心得ているキラーは録音室の方へ行き、軍人の方に背を向けて技師にウインクしてから命じた。「この紳士のために録音テープをとどのえなさい」

技師はとどのえた。しかもスプールを巻きもどしながら録音された会話を全部消去したのである。（注：フィックス・アップという言葉には別に「計略をたくらむ」という意味がある。ここではその意味も含ませられた）まるで黒板に書かれたチョークの跡をぬれたスポンジでふき消したように消してしまったのだ。こうして大喜びしたスパイ将校があとで再生してみると、何も音は出てこなかった。要するにデンバー大学で講演したあの不思議な科学者を追跡中に空軍情報部員が「おお、キラー

！」と叫んだのは、実際は「あいつの首をしめてやる！」という意味だったのである。

さて情報部がやったのは、三月八日一時三十分からデンバー市外へ出発した旅客機の乗客名簿をかたっぱしから調べることだった。彼らはこれを実施し、かつてプロジェクト・ソナーに関係して浮かび上がったことのある科学者で非公式の命令に違反した者はいないかと調査したのである。だがこのマンハントは何の効果もなかった。あの正体不明の科学者はその日デンバーから飛行機で町を出ていなかったのだ。

空軍情報部が見失った容疑者からにがい丸薬を飲まされたとたんに、空飛ぶ円盤はアーク灯の周囲に群がるガの八月の祭典みたいに空中を乱舞し始めた。

その週にはメキシコ市、ロサンゼルス、コロラド州ドゥーランゴ、マザラン、デイトン、ネブラスカ州ゲーリング、サウスカロライナ州オレンジバーグ、ペルーのリマなどで円盤が出現し、チリ海軍までが空中の円盤型物体について報告した。これらの目撃談のほとんどは一日だけの、一晩だけのニュースとなり、翌日は消えて単なるうわさとなったが、あちこちで物語は驚くほどの持続力を示した。

また驚くべきことは、こうした事件の報告の際に要求される二種の証言である。円盤を見たと思う一般人のだれも自分の氏名と目撃場所ばかりか、目撃の前夜一週間に酒を飲んだかどうかについて確かなレポートを持ち込まねばならなかったのである。しかし二年間の調査で空軍はほとんどその実態をつかめなかった。

デンバー大学の講演の場合でも空軍は講演者が匿名を用いるのを許さうとはしなかったのだ。教授団と学生たちは講演内容を公開しないように、そしてそれが科学の学生たる彼らに何の価値があるかを考えるよう

にと誓わされた。しかし講演者は自分が話すことをすべて忘れてくれと聴講者にいったのであり、そのために彼は名前や肩書などを洩らさなかつたのである。

講演者が語った話の一つに次のようなものがある。この地上で最初に発見された円盤は、デンバーから五百マイル以内のある地点で彼の同僚たちが見つけた円盤だというのだ。だが学生たちは探しに出かけようとはしなかった。数名が新聞社へ行き、あとの者は芝生に寝ころんで空を見つめながら午後をすごした。翌日までには空を見つめる学生がほぼ千人近くにふえていた。

この煙の元となったのは空軍の公式な頑固な考え方を押し通そうとする「火」ではない。ただし空軍係官たちはスコットランドの肩掛けにとまったカメレオンみたいに非公式に飛びまわっていた。表面的には空軍は一九四九年のクリスマス・シーズン中超然たる態度をとり、一九五〇年の復活祭中は平静を保っていた。だが科学の電磁気部門の高い地位にある人々から、空中の奇妙な物体は数年間知られていて、一月、二月、三月にはその数が最大にふえたと警告されたのである。新聞の報道記事の増加から判断して、科学者たちはその推定が正しくて空軍側が間違っていることを確信していた。

デンバー大学事件の第二段階は、モスコウから来たスパイかもしれない講演者の名を探り出すか、またはその事件を非難する「カモ」を見つけて出すことであつた。ところがこれが行なわれていたあいだに、チリーのサンチャゴから一通の報告がはいってきた。チリー南極基地の隊長アウグスト・バルス・オルレゴの言葉を引用して、彼の指揮下にある数名の隊員が円盤の写真を撮影したというのである。隊長はレンズのゴースト・イメージの可能性を否定した。その写真は目撃された物体を確証し

たというのである。この連続写真はチリー海軍の上司の意見次第では公開されるかもしれないとユニテッドプレス社に語ったが、いまだに公開されていない。

この報告が明るみに出るや否や今度は同国の気象台から別な報告が出たが、それによると「ダ円体の天体（これは円盤を意味する天文学上の俗語である）」が推定一万八千フィートの高度で目撃されたという。それは空中を東から西へ飛んだらしい。海軍の天文専門家によれば、それは午前十時から午後一時まで空中に停滞し、それから消えたが、数千人の人に見られたという。

チリーは米空軍情報部の管轄圏外にあるので、ペンタゴンからは回答が引き出せない。デンバー事件とはいえ、調査員たちはあの不思議な科学者を追跡するのに忙しくて、チリー海軍から出たうわさなどを気にしているひまはなかった。

ところが、論議の否定的な側にいる人にとって工合のわるいことに、同じ日にメキシコのトナンチントラ天文台の台長が一機の円盤を撮影したと報告したのである。この写真はあまり鮮明なものではないが、それでもエクセルシア紙に掲載した。天文台長ルイス・エンリケ・エルロが三月二日、奇妙な丸い物体がメキシコの上空を飛んだのを写したのだ。すると三月九日にロサンゼルスのアパッチ製粉会社の営業部長ロイ・L・ディミッター——この人はいかなる陪審員にも好意をもたれるようなタイプの人だが——が決定的な円盤騒ぎをひき起こしてしまった。彼はメキシコ市の近くで円盤の残骸が発見され、その中にパイロットの死体があつたと報告したのである。その円盤は径約十四メートル、パイロットの身長は約五十七センチだったという！（以下次号）

生きるための助言

ジッドウー・クリシュナムルティ (6)



● 個人の多面性

その人は弟子たちにかこまれたまま私に会いに来た。弟子というのはいろいろな人の集まりで、裕福なものあれば貧乏人もいるし、高官や未亡人、狂信者や微笑を浮かべた若者もいる。みんなは楽しそうに、その人々の影が白壁に踊っていた。生い茂った木の葉のあいだでオームが鳴き、騒々しいトラックが通りすぎる。若者は熱心な口調でグールー（指導者）の重要さを説いている。他の人々はこの青年の言葉に同調し、青年が明快に要点を述べると微笑してうなずく。

空は青く澄みわたり、ノドの白いワシが翼をばたつかせることもなく私たちの頭上を舞っている。実に美しい日だ。どうして人間は互いに傷つけ合うのか。どうして人間は分離してはまた集まるのか！ 一羽の鳥がぬれた土の中から長い虫をくわえ上げた。

人間は多数者としての存在であり、一人だけで生きるのではない。多数者が存在しなくなるとはじめて一人の存在がある。騒がしい多数者は昼夜互いに戦いを演じている。この戦いは生活の苦しみである。一人を倒せば同じ場所に他の人が立ち上がる。この際限のない過程がわれわれの人生である。われわれは一人を多数者の仲間に入れようとする。するとその一人は多数者の一部になってしまう。多数者の声といっても結局それは一人の声である。その声は権威者ぶろうとする。だがそれは一つのおしゃべりにすぎない。われわれは多数者の声（複数）である。そして一人の静かな声をとらえようとする。たとい多数者が一人の声を

聞こうとして沈黙しても人はやはり多数者である。多数者は決して一人を見出すことはできないのである。

ところが、われわれが直面している問題は一人の声を聞くことではなく、多数者を形成している状態を理解することにある。多数者の中に一人は多数者を理解することはできない。一人の人間は多数の人間を理解できない。一人の人間が他の人間たちをコントロールし、規制し、組織化しようとしても、それは自己閉鎖に終わるだけである。全体というものは一部分を通じて理解できるものではない。だからわれわれは他を理解できないのである。われわれは全体をながめることはできないし、全体の存在を認識することもできない。なぜなら自分が一部分によって縛られているからである。するとその一部分が分裂してまた多数となる。

全体とか多数者の闘争を認識しようとするのなら、欲求というものが理解されねばならないのである。存在するのは欲求の行為だけである。世の中にはさまざまな要求や追求が行なわれているけれども、これらはすべて欲求の結果である。欲求を昇華させたり鎮めたりすることはできないだろう。だからそれは理解されねばならないのだ。理解している人がいないにしてもやはり理解されねばならない。もし理解していると称する人がいても、それは欲求そのものの実体にすぎない。しかし理解者がいなくても理解しようとするところこそ個人や多数者が自由になることなのである。

同調・否定・分析・承認などの行為はすべて経験者（理解したと称する人）を強めるだけである。経験者は決して全体を理解してはいない。経験者は過去の知識を蓄積しているにすぎない。そして過去の幻影の中に理解はあり得ないのである。過去に頼ることは行為の方法をきめることにはなるだろうが、手段を考えることは理解そのものではない。

そして一人の静かな声をとらえようとする。たとい多数者が一人の声を

理解は心（マインド）や想念（ソート）によって行なわれるのではない。かりに想念を静めて心（マインド）に属さないものをとらえることができたにしても、その経験されたことは過去の投影である。以上の過程のすべてがわかったときにこそ、経験者の言うこととは全く異なる「静けさ」が存在してくる。この「静けさ」の中にこそ理解が存在するのである。

訳注 Ⅱ 少々難解な表現であるが、要するに一般多数者の中に真実の理解はあり得ないこと、他人の言説に対する付和雷同や軽率な否定は他人のエゴを高めるにすぎないこと、真実の理解はセンスマインドや想念を超えた内部からの印象によってもたらされること、それには内部にある種の絶対的な「静けさ」が必要であることなどを説いている。

● 睡眠

寒い冬だ。葉の落ちた木々の枝は空中にさらされている。常緑樹はほとんど見られない。遠くの高い山々が厚い雪におおわれ、大波のような雲がその上にただよう。草は茶色と化した。もう数カ月も雨が降らないからだ。春の雨はまだ遠い。大地は休眠している。生け垣の中の小鳥の活発な動きもない。小道はかたまって、きたない。湖には数羽のアヒルが浮かび、南の方にむかってじっとしている。山々は来たるべき春の到来を告げ、大地はそれを夢見ている。

われわれにとって睡眠というものがなくなればどうなるだろうか？ 人と争ったり、陰謀をたくらんだり、いたずらをしたりする時間がふえるだろうか？ それとも人間はもっと残酷に無慈悲になるだろうか？ それとももっと謙虚に、あわれみ深くなるだろうか？ もっと創造的になるだろうか？ 睡眠とは不思議なものだが、この上なく重要なものでもある。大抵の人にとって日中の活動は夜の睡眠中にも続いている。睡眠は生活の連続であり、無味乾燥な生活のあがきの異次元における延長である。肉体は睡眠によって新鮮になる。それ自体の生を有する内臓諸器官は新生する。睡眠中にもうものの欲求は静止し、諸器官に干渉しない。肉体の新鮮化によって欲求の行為は刺激と拡張のより大きな機会を持つ。明らかに内部諸器官に対する干渉が少なければ少ないほどよいのである。心（マインド）が諸器官の世話をやかなければそれほどその機能は健康な自然なものとなる。しかし諸器官の病気は別問題で、これは心（マインド）または器官自体の弱さによって起こるのである。

睡眠はきわめて重要な意味を持つ。欲求が強くなればなるほど睡眠の意味は少なくなる。欲求は基本的には常に積極的である。そして睡眠はこの積極的活動の一時的中止なのである。睡眠は欲求の逆ではないし否定でもない。それは欲求がみずからを押し通すことのできない状態である。意識の表層の静止は睡眠中に起こる。そのために表層部は深層部の暗示を受けることができるのである。しかしこれは全機能のほんの一部分を理解したにすぎない。目覚めているあいだに意識のあらゆる層が互いに連絡し合うことは大体に可能である。もちろんこれは基本的な作用である。この連絡によって心（マインド）は自尊からのがれ、それゆえに心（マインド）は支配的要素にならないのである。こうして心（マインド）は自閉的行為をやめるのである。この過程において、何かになる

うという衝動は完全に消滅し、蓄積された勢いはもう存在しなくなる。しかし睡眠中にはもっと別な事が発生する。われわれの諸問題に対する解答が出てくるのである。意識的な心（マインド）が静まると、それは（心は）解答を得ることができるのである。しかしもっと重要なのは新生である。これは単なる修養ではない。人は一生懸命に才能や能力を養い、技術を身につけようとするが、これは新生ではない。修養は創造ではないのだ。この創造的な新生は人間がどんなに努力しても発生しない。ただ心（マインド）が自発的にあらゆる蓄積された衝動を捨てればよいのである。より以上の経験と達成を得るための手段として経験を蓄積することをやめればよいのである。時間のゆがみを起こし、創造的な新生を妨げるのは、この蓄積された自己防衛的な衝動である。

われわれが一般に知っている意識は時間に属するもので、それは異次元において経験を記録し貯える作用をする。この意識の中で起こるものが何であってもそれは意識自体の投影である。それはそれ自体の性質を持ち、測定できるものである。睡眠中にはこの意識が強化されるか、または全く異なる事が発生する。大抵の人にとっては睡眠は経験を強化するが、それは記録と蓄積の作用であり、そこには自己拡張があるだけで新生はない。自己拡張は何かを理解したという得意満面の気分を起こさせるが、これは創造的な新生ではない。何かになったと感じるこの働きを完全に中止させる必要がある。

睡眠中に、しかもしばしば目覚めているときにも、「何かになった」という気分がなくなると、そして一原因の結果が起らなくなると、時間を超えたもの、因果関係を超えたものが現われてくるのである。

訳注||ここでもやはりマインドの動揺を静めて内奥から来るインスピレ

ーションによる解答の求め方を説いている。しかも単なる変化でなく根本的な新生の重要さを強調しているのである。この文章中に用いられている「意識」は宇宙哲学のそれとは異なり、一般的な意味での用語であるから注意されたい。

●富の放棄

私は緑の谷間を見おろす一本の大きな木の蔭にすわっていた。キツキは忙しそうで、アリが長い列をつくって二本の木のあいだを前後に動いている。海の方から風が遠い霧の匂いを運ぶ。青く、夢見るような姿の山々。ときには近いように見えるがやはり遠方だ。水のもれるパイプでできた小さな水たまりで一羽の小鳥が水を飲んでいゝ。木の間を追いかけ合う二匹の灰色のリス。

その人はかつて大金持だったが、財産を投げ捨ててしまった。いっときはすごい財産があり、その負担が苦痛になることに甘んじていた。慈悲心があり、なさけ深い人だったからだ。惜しむことなく他人に与え、あとは気にしなかった。援助してくれる人たちにはよくしてやり、面倒もみた。金もうけのむつかしい世界で容易に金を作った。自分の銀行預金や投資額が自分自身よりも偉大で、孤独で、他人を恐れていて、自分の富という特殊な雰囲気の中に自身を閉じ込めてしまった人々と彼は違っていた。彼は家族にとって不安のタネではなかったし、また家族に屈することもなかった。多くの友人があったが、これは彼が金持だからというわけではない。

ところが彼の語るところによると、金作りというものがいかにバカげているかということや或る日何かの本で読んで大きなショックを受けたために財産を放棄したという。今はほとんど物を持たず、人生とは何か、物欲を超えたものがあるか、というようなことを悟るために質素な生活をすごそうとしていた。

物を持たないで満足することは比較的容易である。多くの財産の重荷からのがれるには、別な物事を探求しさえすれば、むつかしいことではない。外見だけを質素にすることは必ずしも自己の内奥の静ひつさと浄化を意味するのではないのだ。外見を質素にするのは一応良いことである。それによって一種の自由が得られるからだ。しかし、なぜ人間はいつもまず外見から始めようとするのだろうか？ なぜ内奥の「質素」から始めようとするのだろうか？ それは(外見を質素にするのは)自分のそのような意図を自身や他人に納得させるためなのか？ なぜ人間は自分に納得させようとするのか？ 物事から自由になるには英知を必要とする。ジュエチャーや納得などは必要ないのだ。しかも英知というものは個人的なものではないのだ。そして多くの財産が何を意味するかを悟るならば、その悟りによって人は自由になり、もはや自分が論じたりジュエチャーを演じたりする必要はなくなるのである。人間が戒律や孤独にあこがれるのは、この英知ある悟りが開けないからである。重要なものは所有する財産の多寡ではなく、本人の英知である。そして所有物が少なくて満足している英知ある人こそ莫大な財産に対して自由な人なのである。

しかし満足と質素とは別物である。「満足しよう」または「質素であらう」という欲求はいずれにしても必ずつきまとう。そして欲求そのも

のものは複雑な方向へ進むのだ。満足は「存在するものを」を悟るが、質素は「存在するもの」から自由になる。外見が質素になるのは良いことだが、内部が質素になり浄化されることがはるかに重要である。浄化作用はわざとらしい意図を持つ心（マインド）からは出てこない。心（マインド）は浄化された状態をつくり出すことはできないのである。心（マインド）はそれ自体を調整し、想念を秩序立てることはできるが、これは浄化または質素ではない。

意志の活動は混乱の方へ向かう。なぜなら、いかに浄化されていても意志は欲求の道具にすぎないからである。価値があろうとなかろうと高貴であらうとなかろうと、（変化して）何かにならうとする意志は一つの指令を与え、混乱の中に一つの道を定めるかもしれない。しかしこのような働きは人を孤立に導くのである。浄化は孤立の中から出てくるのではない。意志の働きは一時的に前景を照らすだろうが、背景を明るくすることはできない。なぜなら、意志そのものはこの「背景」から出てくる結果にすぎないからだ。この「背景」が意志を育てるのである。意志は「背景」を鋭くし、その潜在能力を高めるかもしれないが、それは決して「背景」を浄化することではない。

質素は心（マインド）に属するものではない。わざとらしい質素は正しい調整にすぎず、苦痛や快楽に対する防御である。それはさまざまの混乱を生み出す自閉的行為である。そして自己の内外に暗黒をもたらし争いの争いなのである。争いと浄化は共存できない。質素の状態を生み出すのは争いから自由になることであって、争いを克服することではない。征服されるものは更に何度も征服されることになり、こうして争いは際限なく続くのである。争いを理解するには欲求を理解しなければならぬ。欲求はみずからを傍観者または理解者として分離しようとするが、欲求

のこのような昇華は回避にすぎず、それは理解ではない。観察者と観察されるものは二重の働きではなく、単一の働きである。この単一の働きを経験するときこそ欲求や争いからの自由があるのである。この働き（プロセス）をどうして経験すればよいかという疑問を決して起こしてはならない。それは「警戒」と「感受的知覚」が存在するとき起こるのである。人が自分の部屋で心地よくすわっているときに、単なる想像だけで毒へびに出会ったときの実際の経験を理解することはできない。毒へびに出会うためには自発的に道路や燈火から遠ざからねばならない。想念は記録するだろうが、それは争いからの自由を経験することではない。なぜなら質素や浄化は心（マインド）でつくられるものではないからである。

訳注Ⅱ人間の外見と内部の真の質素の意味が述べてある。いわゆる心で（センスマインドで）あれこれ考えても真の質素や浄化に至ることは不可能で、警戒の状態（フライトネス）と感受的知覚作用によって内奥からくる印象に従うべきことを説いている点でア氏のテレパシー理論と一致するものがある。

● 反覆と知覚

町の騒音と匂いが開いた窓からはいつてくる。広い庭では人々が木陰にすわって新聞を読んでいる。ハトがエサを求めて気どりながら歩き、子供たちは緑の芝生で遊ぶ。日光が美しい陰をつくっている。



その人は新聞記者で、敏しょうで知的であった。彼はインタビュイーを望んだばかりでなく、自分自身の問題についていろいろと話したがって来た。新聞記事にするためのインタビュイーが終わってから相手は自分の

経歴について語った。経済的にでなく世間的な意味でその経歴が恵まれたものでなかったという。彼は新聞界で急速に地位が向上しつつあり、将来が開けていた。

人間の心(マインド)には直接体験することがほとんど不可能なほど多くの知識が詰め込まれている。快楽や苦痛の経験は直接的なもので個人的なものである。しかしその経験を理解するには他人のボタン、宗教や社会の権威者のボタンに従わねばならない。結局一般の人間は他人の想念、思想などから影響を受けた「結果」にすぎない。人間は宗教や政治的プロパガンダ(宣伝)によって条件づけられている。寺院や教会は人間の生活に対して不思議なあいまいな影響力をもち、政治のイデオロギーは人間のものの考え方にはっきりとした実質を与えている。人間はプロパガンダによって創られたり破壊されたりする。宗教団体は第一級のプロパガンディストで、説得して信者を獲得するためにあらゆる手段を講じている。

人間は混乱した「反応」の集団である。そして人間の中心は約束された未来と同じほどに不安定である。他人から発せられた単なる言葉が人間にとって重大な意味をもつようになる。それらの言葉は象徴を超えて(言葉を超えて)存在する「実体」よりももっと重要であるかのような感じを与え、神経的な影響を与える。象徴、イメージ、(権威をあらわす)旗、音響などが重要なものとなる。実物よりも代用物が人間の力となるのである。人間は他人の経験について読んだり、他人の振舞を見たり、他人の例に従ったりするし、他人の言葉を引用したりする。要するに人間の内部はカラッポなのであって、このカラッポを他人の言葉や他人が感じる事や希望や想像などで満たそうとする。しかしそのカラッポは続く。

いかに楽しかろうと高貴であろうと、反覆というものは経験の状態ではない。儀式、言葉、祈りなどのたえまない反覆は、それに対して一つの高貴な言葉が与えられる喜ばしい「感じ」にすぎない。しかし経験は「感じ」ではない。そして「感じ」による反応は現実の事実には及ばないのである。事実すなわち実際に存在する物事は単なる「感じ」によって理解することはできない。「感じ」というものは制限された働きしかできないが、理解または経験は「感じ」をはるかに超えたものである。経験が止まると「感じ」は重要となると言葉が意義を帯びるようになり、象徴が幅をきかせるようになる。そうするとレコード音楽が魅惑的となるのである。経験の行為は連続したものではない。なぜなら連続性を持つものが「感じ」であるからだ。「感じ」の反覆は新鮮な経験を出現させるが、「感じ」そのものは新鮮にはなり得ない。新しいものの探求は反覆する「感じ」の中で行なわれ得ない。経験の行為があるときにのみ新しいものが現われるのである。そして「感じ」の追求をやめるときにのみ経験の行為がある。

一 経験の反覆をしようとする欲求は感覚の付帯的性質である。記憶を豊富にすることは感覚の拡張である。一 経験の反覆をしようという欲求は無感覚に通じることになり、死につながるのである。一つの真理の反覆はあり得ないことである。真理は反覆できないものなのだ。それは人間の手で利用できないものである。利用されたりくり返されたりする物は本来生命を持たないものであって、それは機械的な静止したものである。生命のないものは利用できないが、真理は利用できない。真理を抹殺したり否定したり利用したりできたという人があれば、それは真理ではない。プロバガンディストは経験の行為に関心を持たない。彼らは宗教や政治の、社会や個人の「感じ」の組織化に関心があるだけである。こ

のようなプロバガンディストは真理の語り手ではない。

経験の行為は感覚に対する欲求がなくなったときにのみ可能である。物事に名をつけた言葉を作ったりすることをやめねばならない。言葉にあらわすことをしなければ想念の働きはない。だから言葉にあらわすことにとらわれることは、欲求の幻影のトリコになることである。

訳注||ここでいう「感じ」というのはセンスマインドの浮わつた反応というほどの意味で、テレパシクな感知力とは全然別物である。要するにプロバガンディストの言葉に付和雷同することの誤りを指摘し、あらゆる象徴の背後にある(音楽も象徴である)真理をつかむことの重要性を述べているのである。

● 権 威

影は緑の芝生に踊っている。日光は暑いけれども空は真青でやわらかい。垣のむこうから一頭の牛が緑の芝生と人々を見ている。牛にとっては人々の集まりは奇妙な光景だが、緑の草には慣れ親しんでいる。一匹のトカゲがカシの木のエエや他の虫をとらえている。遠くの人々はかすんで、手招きしているかのようだ。

ひとしきり話が終わったあとの木の陰でその女性は、指導者中の指導者が語るのを聞きに来たといった。たいそう熱心だったが、今はその熱心さが頑固さに変わっていた。この頑固さは微笑と適度な寛容とでカバーされている。きわめて用心深くつちかわれた寛容である。しかしそれ

は心（マインド）でなされることであり、そのため急激に激しい怒りに変化することもあった。彼女は大柄で言葉使いはおだやかであるが、自己の信念によってつちかわれた他に対する非難の要素がひそんでいた。抑制したきびしい表情だが、ある友愛運動とその思想に専念していた。いっとき休息してから更につけ加えた。その指導者がいつ語るのがわかるという。というのは、彼女とそのグループはそれを知るための神秘的な方法を心得ているというのだ。しかもそれは秘法とされている。その話しぶりには他人に洩らせない知識を持つという喜びがあらわれていた。

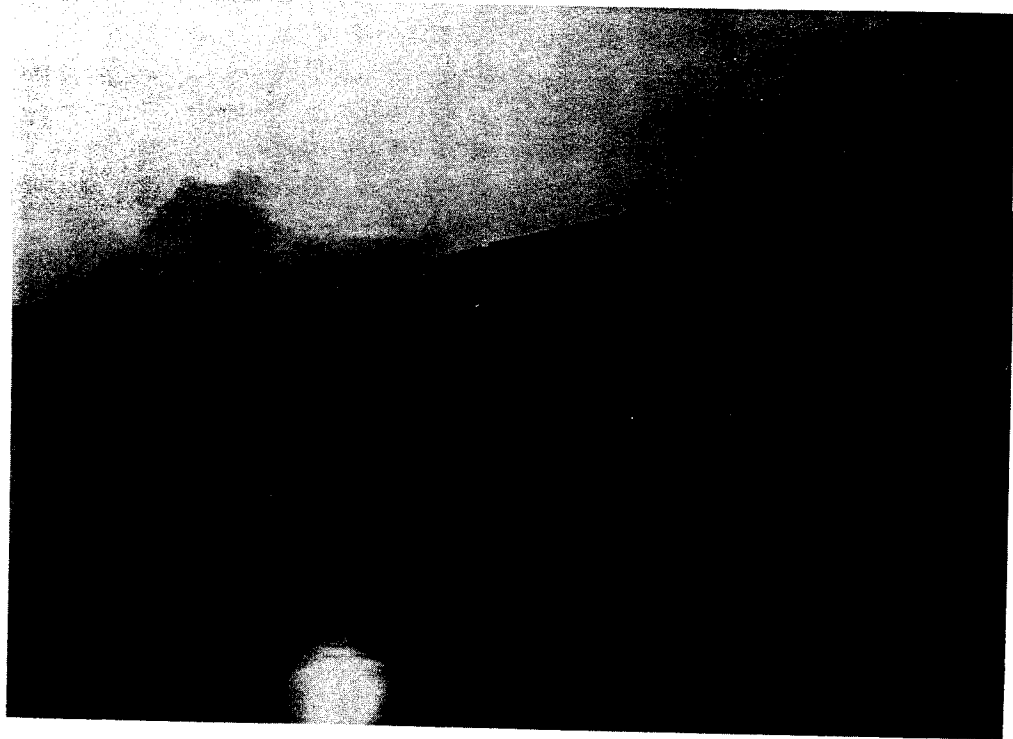
他人に洩らせない個人的な知識は心から本人を満足させる。他人が知らない事を知ることが、常にわき起こる満足の源泉である。それは自分を権威づける深遠な物事に接しているという感情を本人に起こさせる。ある人は直接その物事に接しており、他人が持たない何かを持っている。そこで自分は重要な人物だと思ふ。人々はその人を尊敬し、へつらう。彼らもその人が持っているものをわかち与えられたいからである。本人はリーダーとなり権威者となる。この地位は容易に手にはいる。人々はその人の話を聞き導かれたいからだ。そこで国家の名のもとに権威が確立され、宗教の名のもとに大師と仰がれる。

大なり小なり権威者を崇拜するのは間違っている。特に宗教界のそれに対する崇拜はますますよくない。人間と真理とのあいだに仲介物は存在しないからだ。仲介物があるという人があればその人は曲解者か、いたずら屋である。宗教界で最高の指導者であろうと、それは問題ではない。「知っている」という人も実は知らないのである。その人はただ自分自身の偏見、自己投影による信念、感覚の欲求などを知っているにすぎないのだ。その人は測り知ることのできない真理を知るはずがないの

である。社会的地位や権威は巧妙にでっちあげられるが、謙虚さというもののでっちあげることとは不可能である。徳は自由を与えるが、作りものの謙虚さは徳ではない。それは単なる感覚であり、それゆえに破壊的である。それは束縛であり、何度も破壊されねばならないものである。

“大師”ではなく真の聖者や指導者を見出すことは重要である。しかし人はなぜそれに追従するのか。人はただ何かになろう、何かを得よう、浄化されようとして追従するだけである。しかし浄化は他人から与えられるものではない。人々の内部には混乱がある。それは自分でつくり出したのであるから、みずから手でそれを除かねばならない。われわれは満足すべき地位、内部の安定、宗教団体の聖人の位を得ることはできない。しかしこれらすべては争いと悲惨な状態に至る自閉的行為である。達成した物事に一時的な満足を感じるだろうし、自分の得た地位は当然の結果なのだとか、運がよかったのだと思うだろう。しかし「何かになろう」と望む限り、それには必ず不幸と混乱がつきまとうのである。だがゼロの状態になることは否定ではない。高められた欲求である意志の積極的または消極的行為は常に争いとなる。権威のでっちあげとそれへの追従は理解の否定である。理解があればそこには自由がある。それは金で買ったり他から与えられたりできないものである。金で買われるものは失われるのであり、他から与えられるものは取り去られるのだ。こうして権威と不安が作り出されるのである。不安は鎮静剤やロソクで消すことはできない。それは「何かになろう」という欲求を起こさなくなることによって消えるのである。

訳注——ここでも権威者に付和雷同することをいましめている。



事実は小説よりも奇なり

ジョージ・アダムスキー問題のプロモーションを始めてから二十年近くの才月が経過しました。その間UFOの分野においてさまざまな体験をし、多数の人と接触して意見を聞き、すばらしい情報に接しては胸を躍らせて、疲労の極に達しながらも頑張り抜いてきた私が痛感しますのは、「事実は小説よりも奇なり」ということです。やせさらばえていた若い頃の私の魂をとらえたヘルマン・ヘッセの作品群はもう遠い彼方へ消え去ってしまい、フィクションの世界は私にとって第一義的なものになってしまいました。言葉の遊戯と空想とに陶酔しながら盲目的な生への執着だけで生きている世界の一ファセット(一面)と、驚くべき事実がだれも知らぬ間に行なわれている別なファセットとの大きな相違こそ——そのようなものがあるとすれば——人間の覚醒をうながす最大の要因であると思われます。魚が空気の存在を知るには水中から飛び出る必要があるのと同様に、人間が何かの事実を知ろうとすれば盲目の世界を脱出することが先決問題で、自分の小さなカラの中にこもっていても物事の真実をつかむことは不可能です。そのカラの中でとなえられているお題目が権威ある言葉であるような錯覚を起こしやすなのがこの世界の人間です。

しかしアダムスキー支持者といえども、すべての人が宇宙の法則に従った生き方をしているわけではありません。ここにも言葉による陶酔があります。一体に言葉とはある理念の象徴にすぎず、言葉そのものが実体ではありません。言葉と法則は異なるのであって、その相違を認識し

てかかる必要があります。なぜなら真理の言葉を百万だらとなえても、ただとなえるだけでは自身に何の変化も起こらないからです。これでおかるように、法則の存在を感知するのは言葉を超えたフィリング要素の働きであるのであって、言葉のラ列による論理そのものが感知するのではありません。この点、西洋哲学は論理の遊戯であり、ある意味ではプラトンを一歩も出ていませんが、東洋哲学は人間の感受力の開発に主体をおいているといえます。ア氏の哲学が古代印度哲学に似ているのは当然のことながら人間の感受力開発を主眼目に行っているからです。クリシュナムルティも結局感受力を開発して内奥のインスピレーションに従う生き方を説いているにすぎません。本質的にはア氏のそれと同じです。ただア氏の方はその方法を具体的に解説しており、現代人には最適です。

テレパシーの意義

近年、超能力ブームといわれるほどこの方面に対して関心が高まっています。約二十年前に私がア氏の「テレパシー」を世に紹介した頃からみれば隔世の感があります。当時テレパシーといえば夢物語程度にしか思われず、今でも信じない人が多いのですが、私は少なからず嘲笑をあげたものでした。しかし現在は主として若年層の人達がテレパシー、遠隔透視、予知などの超能力に興味を示しています。これはたしかに好ましい傾向ですが、残念ながら超能力と宇宙の法則との関連までも考えないで、魔術的なショー程度にしか見ていません。これはテレビの影響にもよると思いますが、とにかく、テレパシーは人間の本質の探求と不

可分の関係にあることを悟らなければ、少々開発できても生活に生かすことができず、むしろ増上慢におちいつたりして逆効果をまねくおそれがあります。大体、真の超能力を持つすぐれた人は社会の表面に出ようとはしません。なぜなら、いわゆる超能力なるものは自分個人の力ではなく、自身の内奥に宿る「至上なる英知」から来るものであり、金もうけに濫用すればその能力が減退し、やたらと他人の業苦を除けば超能力者自身が相手のカルマを幾分か吸収するようになるという事実を能力者が心得ているからです。そうした人はひそかに社会を救う活動を行っており、テレビの見世物になったりはしません。もっとも、本物の超能力者がテレビに出演することもあり、それはそれなりに人間に潜在する偉大な能力の可能性について考えさせますけれども、宇宙の法則と人間の生き方まで示唆することはなく、しょせんショーで終わってしまします。

テレパシーはショーではなく、宇宙の法則に従って生きることを他人に伝えるための必然的な手段であるはずですが、自然の法則に従って生きている動物が人間など足もとに寄れないほどのテレパシクな能力を持っているように（白揚社刊・ガディス夫妻著「動物たちの不思議な世界」に豊富な実例が出ている。定価九五〇円）、人間がテレパシー能力を身につけるのも法則に従ったバランスのとれた不安のない世界を出現させるのに必要なのであって、魔術を演じて人を驚かせるためであってはならないはずで、万人がテレパシーを駆使できるような社会は価値観がまるで違うでしょうが、そのような理想世界の実現はほど遠いにしても、法則に従った生き方を基盤として自己訓練を行なった結果開発されるテレパシー能力は、少なくとも本人にとっては絶大な武器となるでしょう。盲目的な判断力だけで、つまり普通の思考力だけで、生き抜くにはこの

地球があまりにも危険な世界であるからです。天災、戦争等が果てしもなく続くこの世界で確実に生き延びてゆくためには、どうしても内部から来るインスピレーションに頼らざるを得なくなってきました。政府は必ずしも国民の生活を保証はせず、職場でいつ不測の事態が発生するかも知れず、いつどこで天変地異が起こるかわかつたものではありません。しかるに人間の思考力は、地震や火事を事前に感知していち早く安全な場所へ退避するネズミ一匹の予知力にはるかに及ばないので、インスピレーションというものを全く無視してセンスマインドだけで判断している人間にとって、これは当然のことです。こうして大衆催眠という現象が起こり、デマに左右されやすく、ちょっと物不足になればたちまち大騒ぎになります。これは、この世界で可視的なタッチャブルな（触知できる）“物”だけが人間のサポーター（支え手）となってしまう、不可視なものを感覚的にキャッチできなくなったからだといえます。

重要なのは言葉による理論の遊びではなく、フィーリング（感知力または実感）であり、内部からわき起こるインスピレーションのキャッチです。人体を形成する細胞がすでに英知ある実体であり、測り知れぬ情報を持っていることは近代の分子生物学で実証されつつあります。けれどセンスマインドを内部のソウルマインドと一体化させよというア氏の説は漠然とした抽象的な表現であるにしても、インスピレーションを引き出すための重大なキイであるように思われます。

とにかくテレパシー開発の自己訓練法はア氏著「テレパシー」に詳述してありますから、それを参考にされるようおすすめます。日本GAPでは毎月東京で行なう月例研究会で約三十分ESPカードを使用してテレパシーの練習を行なっています。これは全くの基礎的段階にすぎませんが、四の五のと討論ばかりやるよりも手っとり早く“実行”する方

が有益であるという見地にもとづいて今年一月の例会から始めたもので、少しづつ成果をあげています。地方在住の会員の方もESPカードまたはトランプのカードを使用して、ぜひテレパシーの基礎訓練を始めて下さい。忍耐強く続ければ必ず効果があります。人間の体は超精密な受信機ですから、練習さえすればだれでもある程度は開発できるはずですよ。やらないで理屈をこねていても始まりません。自動車の運転能力はだれにも潜在していますが、自分はだめだと思つてやらないでいると、いつまでも運転できません。これと同様です。

四官は心を持つ

さて、ア氏の「テレパシー」で読者を容易に納得させなかつた部分は、「四つの感覚器官（眼、耳、鼻、口）が独立して心を持つ」という説明です。従来の学説によれば、眼というものは眼底の視神経細胞（網膜）が外界の姿を映して脳に信号を送る器官にすぎないということになっていました。大体に学校でもこの程度しか教えていないはずですよ。ところが実際はそれだけではなく、網膜は映った光の信号を整理し、形と色を明確化して脳に伝えていた、いわば“考える網膜”であることを発見した科学者がいます。昭和四十六年二月三日に死去された東北大学学長、本川弘一博士がそれです。博士によると、網膜が形と色を明確化すると、いうのは必要な信号を強調し、不要な信号を消去する作用で、これは網膜が状況判断機構の第一段階の役割を果たしているということです。これはもと脳波の研究を行なっているときに、眼からも不思議な波動が出ることを見つけてこれを“X波”と命名したことに始まります。博士の

この大発見は実に昭和十八年のことで、世界の学界に論文が送られましたが、当時は無視されました。しかし数年後にイギリスのエドリアンがこれと同じ現象を見つけてノーベル賞を受けています。エドリアンは後に本川博士が先駆者だったことを知り、シャッポをぬいだということです。博士は更に研究を進めて、光と図形を用いた実験により網膜上で図形から誘導される未知のフィールドを発見し、これを「視場」と名づけて昭和二十四年に世界へ論文を発表しました。ところがその四年後に今度はオーストラリアのエックルスが、網膜を形成する神経細胞には積極的な信号（興奮）を送り出すもののほかに、信号を打ち消す信号（抑制）を送り出すものがあることを発見してノーベル賞を授与されています。本川博士の「視場（誘導場ともいう）」の発見は抑制という実体を突きとめる所までゆかなかったために一歩先を越されたわけですが、ノーベル賞級の発見であることに間違いありません。とにかく「網膜が考える」ということは、網膜の細胞同士が横に信号を送り合って誘導場を作り、図形をくっきりさせていることを意味し、これは判断や思考の働きの基本形であるということになります。

以上でア氏の説が科学的に立証されていることがわかります。アダムスキーがこのような科学に通じていたとは思えず、おそらく別方面から知識を得たのでしょうが、その情報源が何であるにせよ、精神面に関して最高の知識を有していたとみて差支えないでしょう。彼はまた一種の超能力者であり、戦前は私欲を超えて多くの人を救っています。

人体に付属するあらゆるリセプター（受容器）の内、視覚器官が最大の働きをするといわれています。自身の体験や訓練から判断しますと、この器官「眼」がテレパシクな受信作用に対して最も大きな妨害をしているように思われます。つまり私の眼を形成する細胞がひどくエゴの

心を持っていて、内部からわき起こる宇宙的な印象をキャッチさせないように威張り返っているにちがいないのです。したがってときどき私は眼をしっかりとつきます。「眼よ、エゴの心で物を見るな！」と。私の耳も生意気なやつにちがいません。したがって耳の細胞群にも呼びかけます。「勝手な判断をするな！」と。こうした四官が相争っているというア氏の説明をバカバカしいことだと一笑に付す人もあるようですが、その場合はア氏の本を読んだ人の「眼」がそのような解釈をするのであって、その人の宇宙的な実体が解釈しているわけではありませんから、軽べつするわけにはゆかないのです。一体に他人を軽べつすること、軽べつはAという人のセンスマインドがBという人のセンスマインドを軽べつしているだけのことで、宇宙的な実体同士の衝突でないことは、両方とも同じ生命を持って呼吸している現象でわかります。つまり実体のレベルでみればみな同じ創造物なのであって、何の差異もありません。一皮むけば万物が宇宙の意識（英知またはパワー）によって生かされていることに変わりはありません。

慈悲の法則が基本

ある人が今生で恵まれた環境に育って何不自由なく最高の教育を受けながら、しかも全く求道的精神を持たず、ある人は悲惨な境遇に生まれ逆境と闘いながら求道的な生活をするのはなぜか？ これはすべて前世からのカルマによります。カルマというのはもと印度の思想であって、それには動力因と質料因がありますが、ここでいうカルマは少し意味が異なって、原因と結果の法則を意味します。いかなる原因にも必ず結果

が伴うのであって、これは動・反動の物理的法則であり、万物はこの法則からのがれることはできません。そして人間の行動が原因となる場合、その原因のほとんどは想念が占めています。想念も物理的な原因となるからです。他人に対して肉体的な暴力を加えなくても想念において暴力的な要素があれば、それはいつか必ず結果となって現われて自分で刈り取らねばならなくなります。なぜならセンスマインドが起こす想念は、それが良いものでも悪いものでも、公平なソウルマインドがすべて無条件に吸収して、それに見合った結果を実現させようとするからです。人間はすべて法則どおりに生きています。本人が気づこうが気づくまいが、人間や万物はすべて動・反動の法則に従って生きています。邪悪な想念をもってだれかを傷つけようとするれば、それは法則によって必ず現実化します。つまり法則というものは、人間の想念が邪悪であるのが善良であるのが、すべて受け入れて、そのまま実現させようとするのです。こうなると想念ぐらゐ重要なものはありません。結局、人間の運命はすべて想念によってきまるといっても過言ではありません。

このような動・反動の法則を良き方面で生かそうと思えば、「慈悲」が最高のすぐれた要因になるように思われます。つまり自己の行為の基盤が「慈悲」であるならば、良きカルマだけをつくることになり、良き実を刈り取るようになります。そして悪しきカルマを背負っている人も「慈悲」に徹した生き方に切り変えればそのカルマを解消して良き運命を持つことになるのです。要約しますと、人間が良き運命を持つとうすれば、良き想念のもとに「慈悲」に徹した行為を続けなければならぬということです。これが「慈悲は法則を完成させる」という意味です。

「慈悲」という言葉は「愛」または「親切」といい変えても同じことですが、語感からすれば「慈悲」の方が深みがあります。

「慈悲」とは何か。これは自己の想念と行為を万物に対して私欲なしに指向させることで、これはよく太陽にたとえられます。太陽が惑星の万物に対して無差別にエネルギーを放射しているように、人間も万物に対して無条件にエネルギーを指向させれば、太陽と同じ宇宙的な存在となることができます。宇宙の創造主の法則が「慈悲」であることはあらゆる現象で察知できますが、太陽と惑星上の生物の関係を最も端的に現わしています。太陽や惑星や知的生物の存在などを偶然と考えるのが科学的な考え方だと主張する人があれば、それはそれなりのカルマをつくることになるでしょう。また、他の惑星に偉大な進化を上げた人類がいて、ひそかに地球を援助しているという説を真実と考えてもウソとみなしても各人の自由ですが、いずれの考え方をしてもそれなりに本人はカルマをつくっています。人間は想念によって自分の運命をつくってゆきますから、いかなる想念を起こしても必ず何らかの形で結果が現われるのであって、これを絶対に避けることはできません。まことに想念ぐらゐ重要なものはなく、これを無視して良き運命をつくることは不可能です。想念観察の重要性はここにもあるのです。

想念観察というのはア氏が「テレパシー」や「生命の科学」でとなえた方法で、これは自身の内部に目を向けるくせをつけて、インスピレーションを感じやすくするための基礎練習になります。原因と結果の法則に沿って良き結果をもたらすための手段にもなります。これは人間が宇宙的な存在になるための不可欠な方法なのですが、一般人はこのことに全然気づいていません。何かこの地球というのはひょうぶょうとした冬眠の世界のようであり、盲目的な意志に支配されている暗黒の惑星のようでもあります。来世紀になれば一大光明が輝くかもしれませぬ。しかしそれまでには多くの変化があるでしょう。

質問と回答

問 アダムスキー撮影の金星の円盤は電気掃除機を写したものだという説がありますが、これについては？

答 あの写真と同じような円盤写真を撮った人はほかにいます。アダムスキーだけではありません。一九五四年二月十五日にイギリス、ランカシャーのコンストンで当時十三才の少年ステイヴン・ダービシャーが撮影した円盤はア氏と同型の物体であり、これはレナード・クランプという科学者によって確証されました。このフィルムが現像される前に父親のダービシャー博士が息子の説明を聞きながらスケッチした絵も残



ステイヴン・ダービシャー少年(左)

っています。これはアダムスキーの円盤写真に対する傍証となるものです。ア氏が述べた異星人飛来説は遠からず一般人が確認できるようになるでしょう。昨年からの世界的に増加してきたサイティング（円盤目撃）がその徴候を示しています。

問 ノストラダムスについてどう思いますか。

答 不世出の大吉言者だと思えます。おそらく映画でも見るように各民族の未来の運命を透視したものでしょう。ただし現在流布しているノストラダムスの本は著者の解釈に多くの誤りがあるように見受けられます。なおア氏が予言にこだわるなど説いたのは欧米で盛んなくだぬオカルトを意味しているのであって、真実の予言もあり得るのです。これはアカシック・レコードが読み取れるほどの超能力者ならば可能です。

問 ユリ・ゲラーについては？

答 超能力をABCの三段階に分けると、ゲラーはAクラスの超能力者です。しかし彼がカナダから想念を発して日本の多くの時計を直したりスプーンを曲げたりしたのは彼自身の能力によるものではなく、物品を手に行っている各人の想念の力によるものです。

問 よく円盤研究の分野で、地球は遠からず破滅するが、宇宙的に目覚めている人は事前に宇宙人達が円盤や大母船で救出するから準備しておく方がよいという情報が出たりします。これは真実ですか。

答 局地的な変動はあるかもしれませんが、地球自体が空中分解するような終末的大変化に近い将来に発生するとは考えられません。また、いかなる変動に際しても宇宙人が事前に一部の目覚めている人だけを救出することは、宇宙の法則からみてあり得ないことです。救出するとすれば、変動発生地域の全居住者を移動させるのがスジですが、過去の歴史でそのような事実は見あたりません。



ジョージ・アダムスキーの 思い出

ルウ・チンシュターク

私は十年以上にわたってジョージ・アダムスキーと交際しましたが、何より重要だったのは彼が講演旅行でヨーロッパにいたあいだにまる六週間を一緒にすごしたことです。彼の手紙類を読んで私はまもなく彼が純朴ではあるけれども知性人で、しかもすぐれたマナーを身につけているという強い印象を受けました。

アダムスキーの洗練されたマナー

この二つの印象は一九五九年に親しく彼に接したときに強められました。当時私はその洗練されたマナーにしばしば気付きました。たとえばテーブル・マナーがそれです。あるとき私たち一同はバーゼル
の有名な実業家の邸宅の夕食会に招待されました。この家の夫人はオランダの高貴な家の出身です。先方は二十種類の特別な料理を出しましたが（おそろく意地悪い意図でそうしたものと思えます）、それは普通の刃物類を使用したり一般的な食事作法に従って食べるのは全く困難な料理でした。しかしジョージは驚くほど気楽な上品な手つきで食事するので、あとで知人が語ったところによりますと、アダムスキーならばバックingham宮殿の夕食会でも大丈夫だろうとのことでした。先方の夫人はジョージの談話に魅了されたようで、またジョージも雑多な、しかも大変興味ある話をし続けました。

家族的背景について尋ねられたとき、ジョージは

自分の貧しい両親のことを全然隠そうとはしませんでしたし、また自分がポーランド出身であることを誇りにしていました。彼の話では、アダムスキーの「スキー」というのは男性語尾にすぎないので、のけようと思えば容易にできるのだが、父を記念して付けているのだそうです。

ジョージは婦人にたいしていつもきわめて礼儀正しく親切でした。バーゼルのレストラントで私たちについた女の子は、ジョージが多数の客のなかで最高にすてきな客だといっていました。

多くの事実に通じていた

ジョージ・アダムスキーの知性については簡単に説明できません。それは一般にも認められていませんが、これは彼が学者でなかったからです。実際彼は多読家でもありません。しかし時として意外に彼が円盤問題はかりでなく多くの事柄に通じていることがわかりました。たとえば一九五九年にローマでポリマーニ博士夫妻と夕食を共にしたことがあります。ポリマーニは高い教育を受けた若いジャーナリストで、夫人もギリシアとローマの修道院で教育を受けた教養の高い女性です。兩人共心からアダムスキーを信じていましたし、円盤問題の大ファンでした。(ついでながらポリマーニは例のモングッチ円盤写真の最初の印画をジョージと私にくれた人です)

その夜ローマにおける一同の談話は楽しく続きましたが、やがてポリマーニが戦争と、それにユダヤ人に対するナチの残虐行為の話を持ち出しました。すると一同が驚いたことにジョージはもちろんその残虐行為を弁護もしなければ容認もしないで、少なくとも十五分間、戦前のドイツにおけるユダヤ人の状態と、ヨーロッパ人のほとんどだれも今まで知っていない或る立証の事実(複数)を語ったのです。ヨーロッパ大陸についてはほとんど何も知らぬはずの一アメリカ人の口から出る話なので奇妙な感じがしました。

過去を忘れようとしていた

一体にアダムスキーが歴史上の事柄に興味を持っていたとはだれにもいえないでしょう。そのとおりでして、それどころか彼は過去をさらっていました。過去を恥じていたのです。だから次のようにいっていました。「未来に向かうことにして、過去は忘れようではないか」

田舎ヘドライブにつれ出したとき、元ハブスブルク家の居城だったという城を遠方から見せましたら、彼は急に騒ぎだして「ワーッ、もう城は見たくないよ」と叫びます。「イギリスでは次々と城を見せてくれたが、ある城では中世に敵を深い泉の中へ投げ込んだ場所でご馳走を出すんだ! そんな気味の悪い場所は取りこわして忘れるべきだ」

そのとき以来私は古い遺物を見せることをやめました。しかし後にローマで同じような泉のある場所で夕食会を開いたのは仕方のないことでした。ペレゴ博士が自慢してそれを見せたのです。(注) アルベルト・ペレゴ博士はイタリアAGAPリーダー。現在でも活動を続けている)

教会と金銭をさらう

そのうち私はジョージが二つの主な物事をひどくさらっていることに気がきました。その一つは、はいらないですむ場合は決して教会へはいらなかつたこと、他の一つは自分の手に握られられない限り決してお金に触れなかつたことです。

彼がバーゼルに到着した日に私はいくらかの金を渡しました。自分で買物をしたいだろうと思つたからです。しかし彼はその金を使いません。私が付き添っていなければ店にも食堂にもはいらうとはせず、いつも私に払わせるのです。これはもちろんかまわないことです。彼は私の招待客なのですから。しかし私が渡した金が一、二日して消えたと思つた理由があります。私は全然尋ねませんでしたが、話を聞いていううちに、彼がその金を朝ホテルへひそかに訪ねて来た「男たち」へ渡したことがわかりました(この「男たち」というのは彼の知り合いの別な惑星の人たちなのだといっていました)。私が全然知らないこの訪問者たちは私にとっていつもナ



ゾの人物でした。彼らは私がジョージのホテルへ行くまでに必ず来ていました。私がホテルの受付で話し合っていたとき、彼らが来ていることが気になったことが再三あります。彼らはいねいにアダムスキーのことを尋ねて彼の室へ案内されるのでした。第二週目に「男たち」の一人が——異様な風体でしたが——私に紹介されました。相手は実に立派な人のようでしたので、例の金をもらったのはこの人なのだなと思って私はすっかりうれしくなりました。

ジョージが教会へはいるのをひどくきらったことは、まもなく私にとつてひそかな楽しみ種になりました。ただしそれは深い理由のあることで、本来笑うべき事でないことはわかっていたが——。パーゼルでの最初の日に私はもちろん彼を大寺院へ案内しました。彼はその高い尖塔群をいんぎんな態度で見えていましたが、中へはいりませんでした。彼はすぐに一同が渡し船で渡ったことのある河の方へ向きなおりました。これを撮影したかったのです。「これがほんとうの自由エネルギーだ」と叫んで楽しそうに写していました。(注||上の写真がそのときアダムスキーが撮影したものの。ルウが編者に贈ってくれた)

ローマにいたとき私は彼を聖ペテロ寺院へ案内しましたが、またも彼はその建物よりも乗って行った馬車にはるかに興味を示し、馬車から降りようとはしないで、その印象的な乗物を撮っていました。

ところである日ジョージは教会へはいる必要にせまられたのです。レズリー氏(注||「空飛ぶ円盤実見記」の共著者でアダムスキーの親友であるデスマンド・レズリー)は可愛い小さな宮殿(十六世紀ないし十七世紀頃のものを)を所有しています。この宮殿の一部は使用されない礼拝堂になっています。二人の老尼が今もその一階に住んでいて、内部にはキリスト教の初期に殉教者が避難していたといわれる大昔の石造の小室があります。この小室は見る価値があり、ジョージも興味を示しましたが、彼は祭壇

を見ようともせず、全然近寄らないし、一行の他の連中がやったような十字を切ることもしません。一同が聖人の絵画類を見ていたあいだ、ジョージは赤や黄金色の古物で柱を飾るのに忙しい尼たちに話しかけていました。彼はそそくさと礼拝堂を出て行きましたので、デスマンド・レズリーはむしろ驚いたようでした。

一九五九年に、ジョージが聖ペテロ寺院へはいりたくなかった理由は「そこが多数の殺人の行なわれた恐ろしい場所であるからだ」それで、彼がそう語ったのをおぼえています。「この場所は血で満ちている」とつけ加えました。やはり彼はバチカンの歴史に精通していたといいたいところでした。もちろん彼はコロセウムもきらつて中へはいりうとはしませんでした。彼は昔から残っている廃虚に刻まれている波動にきわめて感じやすい人なのです。

西洋哲学はダメという

そうこうするうちに彼の特殊な知性に私は戸惑うようになりました。たとえば、彼はたしかにヨーロッパの哲学者、古代ギリシア人、古代ローマ人、ヨーロッパ人、カント等に精通してはいたかと思えます。彼の最大の関心はだれもが知っているような哲学にありました。あるとき彼は「こんな(西洋の)哲学上の諸説はすべて無意味だ。というわけは哲学者たちが人間の感覚の能力を認めないで知的

能力を過大評価したからだ」と説明したことがありますが。(もちろんこの感覚の能力を感情と混同してはいけません)

彼のしばしば知覚や警戒力に関する人間の能力(まだ人間の内部に眠っている能力)について語り、また彼によればほとんどの人々の内部に放置されているという人間の本能的な力について語りました。彼は例の宇宙語、つまりあらゆる生きもの、植物、動物、人間などのための意志伝達手段を「テレパシー」と呼んでいました。

ジョージは偉大な意志の力を持っていました。それは沈黙を守る能力によってあらわれています。私の意見では、ジョージが日常ほとんどおかれていたような状況下において秘密を守るためには、かなりの理性力ばかりでなく異常なまでに強力な意志力を必要とします。たとえば自分が知っている事柄をしゃべることによって大喝采を博すことができるような場合でも、彼は口を閉じ続けることができるのです。自分の心は秘密事項が埋められている墓場のようなものだと彼は言っていました。

米政府と関係していた?

あるときジョージと私の二人きりになったとき、彼は垣根の両側(これは彼の言葉そのものです)、つまり米国政府とブラザーズ(別な惑星の人)の両方から多くの秘密事項をまかされたと言ったことが

あります。これは彼が沈黙の誓いを決して破らないからで、人から尋ねられたときにはむしろとぼけるようにしているといっていました。彼がホワイトハウスの側道へ通じる秘密のドアから二度ばかりはいったことがあると語った言葉は真実だろうと思います。他のこのような秘密のドア、すなわちパチカン宮殿のドアから彼がはいって行くのを私は見たことがあるからです。(注||本誌前号の「ジョージ・アダムスキーの思い出」を参照) なぜ秘密のドアからはいって、別な入口からはいらないのでしょうか? またジョージの話ではカリフォルニアのホットスプリングが重要な場所だとのことで、しばしばそこへ会合やテストなどに行ったということでした。後に私はケネディー大統領がホットスプリングへの重要な旅行計画を急に変更したと報導されたのを見たとき、このジョージの言葉をはっきりと思いをしました。当時この重要計画の変更の理由について新聞に多くの憶測が掲載されましたが、ジョージはその理由を知っていたと思います。しかし彼は他の事件すべてと同様にケネディーの秘密を守ったわけです。

秘密を守る自己訓練

またジョージは、秘密を守るために人名や場所を忘れる訓練を慎重に行なうと語っていました。その例として、彼の家へ二人の地球人パイロットがや

って来て、地球の言葉でなく別な惑星の文字で美しく書かれた手記を見せた事件があります。この男たちの話では、日課の飛行中に一機の巨大な宇宙船の中へ飛行機ごと吸い込まれてしまい、内部を見せられたあと、宇宙船の乗員の一人が軍事基地について尋ね、ペンを借りて二人の眼前で驚くべき短時間でその手紙を書いたというのです。ジョージはその手紙のコピーを私に見せましたが、そのとき私が内気なためにコピーを作ってくれと頼めなかつたことを今でも残念に思っています。この二人のパイロットは自分たちの名前を忘れてくれと懇願したのでジョージはそうしたと述べていました。この事件は当時評判になりました。なぜなら二人のパイロットは燃料を使用せず、しかもどこにも着陸しないで二時間を余分に費したからです。

久保田八郎訳



ジョージ・アダムスキー

久保田八郎 訳



改訳—

空飛ぶ円盤 同乗記

—(7)

更にしばらくのあいだ私は自分が見ていたものを驚異に満たされながら凝視した。すると相手は私の注意を円盤（複数）の方にひきもどした。「この極小型円盤がしばしば空間を飛ぶのが（地球人に）見られていますし、ときには地球上空を低く飛びます。夜になると光るのです。これらの円盤は地球から放射される種々の波動を記録しながら上空を飛びます。他のあらゆるものと同様に波長や強度が絶えず変化しながら常に運動を続けている波動類を記録するのです。可能なときにはいつでもこの複雑な、高度な探知力をもつ極小型機は母船に帰されますが、ときには何かの理由で連絡が切れて故障するか、または地上に墜落することもあります。このような場合はただちに緊急処置がほどこされます。母船の両側の極小型円盤発射孔の真下には、磁気放射線の発射器があります。極小型円盤が故障を起こすと放射線が発射されてその円盤を分解するのです。このことは砲爆、ジェット機、電気あらしなどで説明つかないような、地球の空に発生する不思議な爆発の理由となります。一方、極小型円盤が地表近くで故障して、爆発すれば地上に損害を与えらると思われ

る場合は、地上へ降下させて弱いエネルギーを送り、爆発させないで円盤の金属をゆっくりと分解させます。最初は柔らかくなり、次に一種のジェリー状となり、次第に液状となって、最後にはガスとしての自由な状態となりますので、あとにはひとかけらも残りません。この方法ならば分解中に円盤に触れてもだれにも危険はありません。ただし、もしだれかが偶然に極小型円盤が落下するのを見て、それが放射線のあてられているときならば、そのとき円盤に触れるとケガをすることがあります」

土星人が磁気放射線について述べたとき、彼らの宇宙船を攻撃する者があったも、それがすばらしい防御装置になるのだろうと私は思った。私の想念を感じた相手は答えた。「ええ、人間や惑星でも何でも、

それに対してこの機械を使用することはまったく可能です。しかし私たちはまだ決してそんなことをしていませんし、そんなふうに変更することもないでしょう。そのようなことをすれば私たちも地球人と変わらな
いことになるからです。

地球の航空機から追跡されたとき、何度もお目にかけてように、私たちの自衛手段は地球人の目が感知するよりも速く逃避する能力にあります。私たちが警戒しなければ、地球の航空機は宇宙船に気づかないでメ
クラ滅法にその中に飛び込んでいきますからね。急接近させて激突します
と、私たちの宇宙船がもっと低い振動で作用しているかのようになり船体が
堅固であることに気づくでしょう。その衝突によって航空機はバラバラ
になります、私たちの船体は全然傷つきません」

「私が今まで聞いたところから判断しますと、あなたがたのすばらしい
宇宙船でさえも、ときには何かの事故が生じるようですが——」

「ええ」と相手は答えて「そんな場合、もし大気圏外だとして、もうど
うにもならないということになれば船体を放棄します。その必要が起こ
ったときは船体が分解されて宇宙の元素に還元されます。各大母船には
非常用の小型機が積み込まれていて、それには十分な必要品や、宇宙空
間にいる他の母船または惑星とさえも連絡できる一切の必要機械設備が
そなえてあります。しかしそんな事故が惑星の近くで起こったら、ちょ
うど地球の航空機が墜落するように私たちも墜落するかもしれませんね」
すぐに尋ねた。「そうなるに乗っている人はみな死ぬのですか？」

「そうです」と相手は答えて「しかし私たちは理解していませんので、地
球人のいうような“死”によって恐怖心を起こすことはありません。だ
れも自分自身を英知として認めており、肉体とみなしてはいないのです。
こうして、生まれ変わりによって私たちはまた新しい肉体を受けとるの

です。

また、私たちは理解していますから、英知の表現である他人の肉体を
故意に破壊するようなことは決してしません。しかし事故によって故意
でなしに死に至る場合は責任はありません。それは自分の欲求でないか
らです」

われわれが立って話し合っているあいだ、各装置は作動を続けていた。
パッパッと光が明滅するスクリーンを見つめながら、まだ見たことのな
い変わった機械装置がもっとあるのではないかと思った。

この無言の思いに答えてズールがいった。「ええ、極小型円盤室とバ
イロット室のあいだにある別な大きな室には、まだ沢山の機械がありま
すが、それらは宇宙飛行中にだけ操作されるのです」

研究室と記録用極小型円盤室を見学しているあいだ、私は時間の経過
にまったく気づかなかった。この母船がまだ地球の大気圏内にいるのか、
それとも大気圏外を急スピードで飛行しているのかはわからない。とい
うのはスクリーン類を見ていたものの、他の人のようには解読できな
いからだ。すると土星人パイロットがいう。「私たちは月からそう遠くな
い位置にいます」

この言葉を聞いて私は興奮にふるえて、そこへ着陸するのではないか
と思った。

「いいえ」と彼はいう。「今回は着陸しません。しかしあなたが月に関
して推測していたことをご自分でたしかめていただきたいのです。月に
は空気があります。それを記録できるほどに接近していますから、本船
の装置によってそのことがわかります。空気というものは本来他の天体
を観察するのに障害にはならないのです。地球では障害になるといわれ
るのときどき聞きますが——。地球からは月の上空を動いている厚い

雲（複數）が見えませんが、地球の科学者たちはときたまいわゆる“ゆるやかな空気の流れ”を観測しています。特にいわゆる“クレーター”と呼ばれる谷のポケット地帯の中にです。たしかに彼らが見るのは動く雲（複數）の影なのです。地球から見える側の月面には実際の雲（複數）を見るチャンスはあまりありません。これは雲が濃密にならないからです。ところが月のリム（ふち）のすぐむこう側の、温帯ともいえる部分の上空には、地球の上空の雲と非常によく似た濃密な雲が形成され、それが流動したり消滅したりしているのがこの装置でわかります。

地球から見える側の月面は地球の砂漠地帯にたとえればよいでしょう。地球の科学者が正しく主張しているようにそこは熱いですが、温度は彼らが考えているほど激烈なものではありません。また地球からは見えない側（月の裏側）はもっと冷たいのですが、これも彼らが信じているほどに極寒でもないのです。地球人たちが科学者のせまい知識に疑いを起こすことなく、学者とみなされている人々から出る説を信じ切っているのはおかしなことです。

月の中心部には美しい地帯があつて、そこには草木や動物などが生きていますし、人間も快適に生活しているのです。地球人さえもそこに住むことができるでしょう。人体というものは宇宙で最も順応性に富んだ一種の機械なのです。

あなたがた地球人はこれまで何度か“不可能”といわれてきた物事を達成しました。人間の空想するものでほんとうに達成できない物事は存在しないのです。

ところで月の話にもどりましょう。宇宙空間のどんな天体でも、熱かろうが冷たかろうが、地球人のいう大気または寒暖を発生させるガス類を“持っていないければならない”のです。それにもかかわらず地球の科

学者は月には空気がないと主張する一方、その天体に暑熱や寒冷があることを認めています！ 月は地球や私たちの惑星ほど多量の空気を持ちません。これらよりもはるかに小さいからです。それでも大気はあるのです。

「あるいはこの点をもう少しはっきりと説明できるかもしれません」と土星人が続けて「地球には海中に小さな島がありますね。見渡す限り陸地はありません。しかし人間はいわゆる“大陸”というもっと広い陸地に住むのと同じようにこの島に住むことができます。宇宙空間の各天体はこの島のようなものです。大きいのもあれば小さいのもありますが、すべての天体はそれに生命を与える唯一かつ同じパワーによって囲まれ支えられているのです。

地球の多数の科学者は月が死の天体であるという考えを表明してきました。その言葉に従って、それが真実で月が死んでいるとしたならば、月はとっくの昔に崩壊によって空間から消えていることでしょう。

違います！ それはまったく生きた天体で、人間を含む生命を支えているのです。私たちは月のリムのすぐむこう側の、温暖ながら少し冷たい地域に一大研究所を建設しています」

私自身の肉眼で月の表面を見れるほどに母船が近接するのかと尋ねてみた。

相手は微笑している。「その必要はないでしょう。ここへ来てごらんなさい——この装置によれば現在位置から短距離内に月を引き寄せる（拡大する）ことができますから、あなたはまるで月面上を歩いているようにはっきりと見ることができますよ」

現在月からの距離はどれくらいかと尋ねたら、「約六万四千キロ」とのことだった。

私は月のまわりを一周すればよいとしきりに思っていた。そうすれば相手のいう月の裏側の温暖地帯に存在するものを自分で見ることができらるだろう。同時に、私に見せても差支えない物がそこにあるかもしれない。この考えに対して土星人パイロットからすぐに確証が返ってきた。

「私たちが何かを洩らす前に、すでにあなたに与えられた知識でもってあなたをテストする必要があります。たぶん地球人よりも進歩している私たちは、人間の弱さを——正義を行なおうという大きな欲求をもっている人たちがさえも弱さがあることを——知っています。私たちは地球の破壊を増大させないように慎重である必要があるのです」

近距離にして月を観察する装置が調整されると、私は地球に最も近いこの天体に関する地球人の概念が完全に誤っていることを知って驚いたのである。クレーターの多くは実際には過去における月の内部のすさまじい隆起によって形成された、けわしい山に囲まれている大峡谷なのだ。地球から見える側にはかつて多量の水が存在したと思われる明確な跡を見ることができた。

ズールがいう。「月のこちら側の山々の中にはまだ多量の水が地中深く含まれています、むこう側にも沢山の水があります」続いて彼はクレーター群で囲まれた山々の斜面に、大昔の水流のはっきりとした跡があることを指摘した。

たしかにクレーターによっては月面に落下したイン石によって形成されたものもあるが、こんな場合は明らかにじょうご型の底を示している。続いて眼前のスクリーンに映される拡大された月面を見ると、地面や深い谷の中などを通っている深いスジ（複数）に気づいたが、これは過去の大水流で作られたものにほかならない。この地域にはまだあちこちに非常に小さな植物帯があるのが見える。その地面の一部分は美しい

砂粉状だが、一方、あらい砂またはこまかい砂利に似た大粒の石をしいたように見える部分もある。じっと見つめると、その見つめていた地面を一匹の小さな動物が走って横切った。毛皮の四足獣であることはわかったが、走るスピードが速すぎて、どんな動物かは見当がつかない。私が見た物で不思議に感じた物はほとんどない。なぜなら多年私はこんなものだろうと考えたり話したりしてきたからである。土星人はこのことに気づいていたらしい。彼らが今この近接観察をさせるようにきめたのは、ある程度はこのためだといったからだ。後日、月の裏側を見せてやろうと彼は約束して、つけ加えた。「裏側もあなたが想像していた状態とあまり違いませんよ」

約束し終わると、月を映していたスクリーンは空白になったが、他のスクリーン類はまだ作動していた。

ズールはふたたび私を極小型円盤室へ案内したが、そこへ着くまでに婦人たちが迎えに出ていた。土星人が休憩室の方へ引き返そうといったので、私たちといっしょにエレベーターに乗ってきた例の六人の男が席から立ち上がった。

● 別な指導者との会見

第10章

ふたたび美しい静かな休憩室へはいって、大きな円形のテーブ

ル上のグラス類にまた液体が満たしてあるのに気づいた。私の判断で四十才前後と思われる男が一人、一同の到着を待っていた。室内へはいると彼はイスから立ち上がった。いかなる種類の紹介もされないが、彼がよく知っているらしい他のすべての人に対するのと同様に、私に対する挨拶もていねいである。私としては初対面でない人がそこにいるような気がして、相手に対してすぐに心からの愛情と親密さを感じた。たしかに一、二度は読者も（見知らぬ人に対して）これに似た経験があるだろう。その人の出現は室内に集まった一同全員のなかに流れる調和と理解の感じをはかり知れぬほどに高めたのである。

片手を軽く動かしてその人はテーブルのまわりにすわるように合図した。私の真向いにイスが一つ加えられていて、そこに彼がすわった。またもファーンコンとズールが私の両側に着席する。今は主人役をつとめるマスターのすすめで、一同はグラスを持ち上げて無言で液体を飲んだ。みんなは彼が話すのを待っているようだ。彼の黒茶色の眼は生きていることの深い喜びをたたえているかのようにきらめいているが、私の想念のすべてを見通すことができることも私にはわかっていた。また、彼が目にするものは何でも理解し、非難はしないことも私にわかっていた。

均整のとれた、がっちりした体格である。きちんと刈られた黒い髪には白髪などはなく、非常に豊かな髪で、柔らかな自然の波を打って広い額からうしろへなでつけてある。骨ばった顔つきはいちじろしく美しく、内部にひそむ魂によって絶えず精化されているような印象を与えている。大いなる親切さに満ちた彼のまなざしは、すばやく一同の顔を見渡した。それから柔らかな活気に満ちた声で直接私に話しかけてきた。

「私たちは「父の宇宙」のごくわずかな部分をあなたにお見せできて、うれしく思います。地球におけるあなたの生涯の大部分をついやしたほ

どのこの問題（宇宙問題）に対するあなたの関心についても、私たちにわかっていきます。今あなたは長いあいだ意識的に気づいていた多くの物事が私たちの機械装置に記録されるのを肉眼で見ました。この体験はあなたに自信を与え、地球の人々に宇宙の法則を説くときに大きな助けとなるでしょう。

友よ、人間がどこに生まれようとも、つまりどこで生きることを選ぶうとも、すべては兄弟姉妹であることを彼らに指摘し続けなさい。国籍や皮膚の色などは偶然のことにすぎません。肉体は仮の住家にすぎないからです。これらは永遠の時間を通じて変化します。あらゆる生命の無限の生長において結局はだれもすべての状態を知るようになるでしょう。

“無限者”の果てしない広大さの中には多くのフォーム（形あるもの）があります。あなたは私たちの宇宙船内を二度見学して、地球の気候という限界の外側でこのことを見えています。こうした物体は肉眼で見えない非常に微粒子から、無数にある最大の惑星や恒星に至るまで、大きさはさまざまですが、すべては“一つの力”という海の中にひたっており、ワン・ライフ “一つの生命”によって維持されているのです。

あなたの世界では目に見える多くのフォームに名をつけています——人間、動物、植物などと。名称というものは人間の知覚作用にすぎませんが、一方、この（宇宙という）無限の海の中では、あなたがたが用いている名称は無意味です。“無限なる英知”はそれ自体を名づけることはできません。それは完全であるからです。そしてすべてのフォームはこの“完全さ”の中に生きてきましたし、今後も絶えず生き続けるでしょう。

多くのフォームのなかでいわゆる“人間”が地球上で唯一の真の英知を持っていると称していますが、これは間違いです。地球でもこの無限

の宇宙の中のどこでも、ある程度英知を表現していない現象は存在しないのです。万物の「聖なる創造主」が創造物の表現者であるからです。つまりそれは創造主の現われなのであり、創造主の英知の想念の表現なのです。

人間としてのあなたはこれ以上でもこれ以下でもありません。万物を支えている生命そのもの、そして万物を通じてみずから現わしている英知こそ、聖なる表現なのです。

このことを知らないほとんどの地球人は、自分の個人的な自我の外にある多くの物事に対してひどく非難をしており、万物が自己の目的を現わして奉仕のために創造されたのだからその奉仕をするのであるという事に気づいていません。何を審くことのできるフォームは存在しません。すべてのフォーム（万物）は「唯一の至上者」に対する奉仕者にほかならないからです。存在するすべての物を知っている人はいないので、知られるはずのすべての事を知っている人はいません。しかし喜んで奉仕することによって、万物は自分に英知を与えてくれる源泉に対する理解が増大するのです。この英知とは自分たちを存在させている同一の生命力です。

この完全な概念によればあらゆる現象は多くの色や多くの種類が互いに調和して咲いている、広大な庭園の中の美しい花にたとえられます。どの花も他の花の現象化を通じて自己を感じるのです。低い花は背の高い花を見上げ、高い花は低い花を見おろします。さまざまの色は全体にとって一つの喜びです。生長してゆく状態は各自の興味を満たし、達成しようという欲求を強めます。一日かかるとせよ一世紀かかるとせよ、内部にひそんでいる美しさが展開するのを見れば、企画されたものが次第に色づいて他のすべてに対して芳香を放ちながら現象化してきます。

万物は他に奉仕をすることによって自己に栄光を与え、かわって他のすべてから奉仕を受けます。その大きな美の広場にあるすべては与え手であり受け手でもあり、「最高者」からくるメロディーを流れ出させる容器です。

このようにして、王座の下で奉仕するのかもしれない奉仕するのでもあって、すべてがそのまわりで奉仕します。万物が他のすべてと調和し、奉仕の特権を与えられて喜びのみを現わすのです。

同じように、あなたが人間として知っている人類は地球で生活を始めるにあたって生き方を学んでいけばよかったです。しかしこのレッスンにおいて（地球の）人間は失敗しました。もしそうでなかったらあなたの地球は喜びの庭、奉仕しようという絶えまない欲求の庭になっていたことでしょう。しかし人間は理解力の欠乏のために、地球上の存在の調和を破壊しました。彼らは隣人に対して敵意をもって生活し、心は混乱して分裂しました。まだ平和を知りませんし、真の美を見ていません。物質的な達成をどんなに誇ろうとも、人間はまだ地獄に落ちた魂として生きています。

こんな暗黒の中に住んでいるこの人間とはだれなのでしょう？ それは「不滅なる者」に奉仕しなかった救われざる者です！ 「道」について語るのは人間ですが、行くべき道を探し求めようとはしません。自分の束縛された心の理解を超えたものをすべて恐れるのは人間です。魂の飢えを否定するのは人間です。

そして文字通り人間は恐怖そのものと化してしまい、その恐怖が全生命や万物に対してしっかりと衛兵の役目を果たしているのです。というものは、もしこの恐怖がみずからの影から（人間から）脱け出せば、それは存在しなくなるからです。生涯の終わりまで人間を囚人として閉

じ込めているのはこの恐怖なので。

たしかに今日地球にいる人間は、いわゆる死の恐怖のもとにわびしく生きています——個人の暗黒の荒野の中でただ一人、肉体の生涯の終わりを恐れながら——。しかも人間自身が、それほど深く悲しんでいるそのわびしさをもたらしたのですが、これはすべて自分をとり巻いているより謙虚なフォーム（複数）が自然のままに奉仕をするように、そのように奉仕しないためです。それどころか人間は生き残ろうとして他の生命体を破壊し続けています。こうした他の生命体に本来の奉仕をさせさせずれば、人間に豊かさを与えてくれるものを、それを人間は認めていません。

ああ、地球の人間の住む地域は荒れ果てています。人間がわずかな理解力でまく種子はにがい実を生じます。それでもなお人間は無知に束縛されて、何世紀ものあいだ過失をくり返し、魂が熱望するものを見つけようとし、それを求めて魂は泣き叫びます。

人間は自分が立っている場所——自分で築き上げた地上の基礎——が他人から取られて無一物にならないようにしようとして、追い払われることを恐れています。そこで人間は永遠なるものでなく変化と崩壊の過程にあるものに対して、発生している事に盲目になるまで、警戒しているわけです。人間は「永遠の一体性」の道へ自分を導くかもしれない光を自己の内部に閉じ込めてしまいました。しかしその道を進んで行った他のすべての人たちはたしかに歓喜を得ています。この人たちとはあらゆる世界にいる、「唯一の父」の召使い、息子、娘たちです。多くのフォーム、多くの色、多くの陰、多くの高さと低さ、すべてが参加できる天国の調和の歌を昼夜をわかつた歌い表現する喜び、などの満ちた美しい野原の創造主なる「父」——」

彼が語るにつれてその言葉が描き出す光景があざやかに眼前を通過し、またも地球人の苦境に対する私の理解が深まってきた。話が終わってもだれも動かない。私も沈黙を破りたくなかった。

光景が私の心から消えると、マスターは向かいの席から立ち上がって、テーブルをまわって私の方へ歩み寄って来る。すると全員も起立して無言のまま立っている。

偉大な指導者が私の片手に軽く触れる。すると彼が与えてくれた言葉に対する謙虚な感謝で全身がふるえるのだった。いつまでも彼の面前にとどまりたかったが、以前の体験からここにはならないことがわかっていった。

「友よ、地球で嘲笑や不信にあおうとも失望してはいけません。今までにお伝えした知識によって、これが間違っていない理由がわかるでしょう。あなたが学んだ事を兄弟姉妹たちに語りなさい。包容的な心を持つ人は多勢いますし、これは今後もふえるでしょう。」

小型機が待っています。私たちの兄弟があなたを地球まで送ってゆきます。私たちはこんなふうにしていっしょになっていたのですから、あなたはもっと容易に自分の心から私たちの心へコンタクトすることができます。空間は障壁にならないことを常におぼえて下さい。相手の言葉は私の全身をくまなく満足感で満たした。私に別れを告げてからマスターは部屋を出て行った。すぐにファーンとズールが合図をする。新しい友人たちに別れの言葉を述べて、休憩室のドアが音もなく開いてから、私たちはエレベーターのプラットフォームを横切って待機している小型機へ乗り込んだ。

ゆっくりと下降し、音もなくレールをすべり降りて、巨大な母船から

離れて行った。地球へ向かって飛びながら私は、この小型機の帰りを待って空間にとまっている大母船をふり返って見た。この大きさはどれくらいあるのだろうか？

私の想念は言葉に出さなかったが、ズールが答えた。「あなたなら地球の数字で直径約九十メートル、全長一キロばかりと推定するでしょう。正確な数字ではありませんが、大体そんなものです」

小型機のドアが開くまでには数秒しか要しないように思われた。われわれは地球へ帰ったのである。パイロットは私たちと同行しないので、円盤内で別れの言葉がかわされた。

火星人と私は数時間前に車を置いた場所へ歩いて行き、ホテルまでのドライブを始めた。円盤の方をふり返ると、空中高く飛び上がり、急速に視界から消えてゆくのが見えた。

以前の場合同様に、ホテルへのドライブ中は無言である。しきりと考えていたために話したくはない。私はただ空気が早朝の新鮮さに満ちて最初の太陽の光がまさに輝き出ようとしていたことだけおぼえている。マスターの言葉を思い出すのに懸命になっていたので、途中の風景には注意を払わなかったのだ。

車がホテルの前でとまるとファークンがいつもの方法で私の片手に触れていた。「また会いましょう」

また会えることはわかっていた。そして肉体は地球に帰っていても、意識においては地球上と、宇宙空間をあまかけて来た他の世界の友人たちの両方と共にある。われわれは分離していかないし、今後も分離はあり得ないと気づくのはすばらしいことだった！あの賢者が私に語った庭園の花園と同じように、この現世の旅路を通じて私の内部に眠っていた一つの認識が、今夜突然目覚めて花咲いたのである。この認識からわき

(30ページの写真はアダムスキーと
彼が描いたイエスの肖像画)

ロチェスターのゴダック社を訪問した際の
アダムスキー。右側は米国GAPのウィリアム・シャーウッド。



起こる心中の歓喜は分離なく調和した無限のメロデーのようであった。そしてこの認識を地球人にわかち与える方法が見出されるようにと祈ったのである。

ホテルの自室へ帰ったが眠れない。この夜の体験は私を非常に元気づけたので、私は自分を新しい人間のように感じる。心が目覚めて、かつてないほどの新鮮な急速な想念をキャッチするのを感じるのだ！私の心は喜びにふるえ、肉体は長い睡眠のあとのように新鮮である。今日は仕事か沢山ある。そして明日は山の家へ帰らねばならぬ。しかし今からは人間が本来やらねばならぬ、そしてそのためにこそ創造された、唯一の英知”への奉仕をしながら、精一杯に充実した時々刻々を生きることにしよう。

(第十章終わり。以下次号)

声

久しぶりに筆を取らせて頂きます。ニューレター第五十三号で先生が「コスモ」を発行されたことを知りました。変わらぬ奉仕活動に頭の下がる想いで

す。先日社用でアメリカ出張の際、ロサンジェルスに立ち寄り、ナイト・サイト・シンキングを楽しみました。途中グリフィ天文台で宇宙観測機器等を見学して展望台に出たところ、円盤を目撃しました。翌日（十月十七日）の土地の新聞に大きく報導されており、米國でのUFOに対する関心の大きいことを知りました。私自身も活字により方法で地球改革に参加するつもりでおります。先生も健康に留意され、目的を完遂されることを祈ります。

（東京 青原 敬）

先日は大切なスライドと十六ミリを借用させて頂きました。まことにありがとうございます。日吉祭も無事に終了しました。わが宇宙哲学研究会も一応その目的を達成し、成功のうちに幕をおろすことができました。この成功は日本GAPの協力があったからと存じます。本当にありがとうございます。部員一同も久保田先生がわざわざ日吉まで足を運ばれましたこと心から感謝しております。

日吉祭においてのスライドと十六ミリの反響を少し御報告しておきます。スライド「UFOとGAP」については各コマ間のテープ間隔が長すぎて、見ている人にあき

られてしまいました。この点については、我々はあとで録音し直しました。また解説の内容がGAP会員向きすぎて、簡単でしたので、素人にはよく理解できなかったようです。訪れる人はUFOに興味ある人が多く、このスライドがGAP以外の人々にGAPを紹介する目的をもっているのです。リーダーの紹介によりGAPの活動や功績についてもっと具体的に知るべきであったと思います。十六ミリについてはとても興味・関心を示してくれた人が多く、こちらも満足しました。ただあのフィルムがGAP会員用のもので、素人（基礎知識のない人）にどの程度理解してもらったか不安な点もありました。でも今回のスライド・十六ミリを通して、UFOを信じる人も信じない人も、もう一度あらためてUFOについて考えなおしていただくよう、我々の目的は十分に達成したと満足しております。（横浜市日吉 慶応高校宇宙哲学研究会代表・二年生 江島 治彦）

ある人間が存在した。彼はまだ非常に若かったため宇宙の栄光に満ちていた。しかしまもなくその栄光は奪われた。環境という外部のある一連の習慣作用によってである。彼はその習慣作用を信じた。しかしやがて成長してゆくに従い環境の広さに気づき始めた。彼は自分でもよくわからないある衝動に従い始めた。欲求という衝動である。やがて環境の広大さに気づき始めた。大宇宙という実体にある。そして習慣作用は大宇宙のほんの一部の中の一部であるにすぎないことに気づき始めるとともに、

習慣作用によって眠り込んでいる様々な人を見始めた。そしてそのような習慣作用に対してやがて理解と信念と忍耐とをもって対抗し始めた。彼の生活は変わり始めた。彼の心が知らなかった偉大な宇宙の力と知恵を感じた。いつのまにか幸福をしっかりと握っている自分を発見した。そしてその気迫は習慣作用とともにあったが、その作用を吹きとばす力に満ちていた。怠惰は活動に変えられ、そして喜びがあった。彼は最初に与えられた偉大な知恵と一連の徑路に感謝した。また自身の意識に感謝した。そして人間という偉大な可能性に気づき始めた。それは無限という主の方向にダイヤルを合わせるのだ。感官の誤用を除く高低上下、左右、いかなる位置にしようとも、それらはすべて栄光に満ちている。自身は偉大な力の認識と決意なのだ。それを見つけることなのだ。そして主と調和したときに第二の創造性のすばらしさを心全体が見るに違いないのだ。我々の主が各面に対して警戒性を、知らせを伝えるのと同じような性質を帯びた音響と文字とでもって、天使の偉大な知恵を伝え知らせる活動であるところのGAPというものが、地球の習慣と想念帯を次第に変えてゆく重要な要素となるように願ってやみません。宇宙的な意志に従おうとする心の意志に栄光あれ！ 久保田代表へ。（一会員）

GAPニューレターを毎号お送り下さり、有難うございました。非常に興味深く読ませていただいております。今日郵便局扱いで五十フランお送りいたしましたので、

会費としておおさめ下さい。今後の大きな御発展をお祈りしてやみません。小生元気でやっております。パリーは急に秋深まり、木の葉が紅葉しています。みなコートをつけ、家の中は暖房が始まっています。御健闘を祈ります。（七三年十月三日付）（パリー 吉見かおる）

私は「生命の科学」は実に完べきな哲学だと考えていますし、月例研究会の精神的雰囲気すばらしさには絶大なる敬意を表するものです。

私はごく最近まである宗教団体に属していましたが、いつも様々な矛盾を感じていました。高文社刊「空飛ぶ円盤とアダムスキー」にも書かれておりましたように、戦後発祥した新興宗教は個人のエゴを満足させるような個人的な真理が強調されて説かれており、それは魚に対するエサを表現しているように思われます。エサ（食物）は空腹を満たしてくれませんが、一時的なもので、周期的に「満たされない状態」が必ずややってきます。また狂信的に組織の拡大を叫ぶあまり、土台をなおざりにした空間に積木を置くような信仰生活に、せっかくの「すばらしいもの」が失われてゆく息苦しさを感ずりました。今あらためて考え直すと強迫観念と束縛とに本質がゆがめられ、かなりまいていました。そこでは「理論ではないんだ。すばらしいと思ったら伝えなさい」とさかんにいわれましたが、大切なのは盲目的な人集めではなく、理論であり、それに裏付けられた個人の実践だと思えました。人は「神」のことをあたかもオ

トギ話の主人公のように解釈していますが、「神」を的確に把握し、信仰の前に「信仰とは何か」「何のための信仰か」ということが解っていないと、軌道からそれてしまった信仰生活になり、仏教だと千回念仏をとなえようが万回となえようが、それは空念仏にすぎず、何の意義も価値もないものだと思いたく思ったものです。

古人のことわざに「急がば遅れ」という言葉があります。組織は小さくても根を頭丈に四方に張ってコツコツ前進する者には魅力をもって集まってくるのだと思います。狂信的に入会をすすめると人は警戒します。

あまりかんばしくない私の過ぎ去った日のことですが、しかし今私は幸福感で一杯です。「生命の科学」は今までに説かれてきたいかなる教えよりもすぐれており、すべてが明確に説明されているように思われます。(埼玉県 小野 守)

お褒りございませんか。先日、総会、月例会と出席させていただきました。その時の高揚した気分は今までの経験から、二度あるかないかと思っただけでした。総会では宇宙機の母船団を見ることができず残念でしたが、ずいぶん驚きました。例会にもこれからできるだけ参加させていただき自身の修養に努めたいと思います。

意識ということについてガンジーも「お前は隠せず世界に直面せよ。恐れるな。お前の胸にある小さなものを信頼せよ。友も妻もすべて捨てることがあろうとも、お前が命を賭けてきたものを証言せよ」と自ら

分の内なる何ものかが私(ガンジー)に語りかける、といっています。やはり過去におけるある偉大な大師においても意識による指導があつてこそ成功し、確信があつたのでしょう。本当に味わいのある言葉ですね。それではお体を大事にして下さい。(埼玉県 菅原一浩)

十二月も半ばにはいり、さらに寒さの厳しさが感じられてきました。先生もさぞかしたいへんお忙しい日々をおすごしになっておられることと存じます。

あの盛大な昭和四十八年度日本GAP総会から二十日間ほど経過してしまいました。が、自分の現地点の生活をふり返りから反省を見出している今日です。

総会・月例会の催しの中に必ず大きなテーマがありますが、それが「十」であるとすると、そのうち少なくとも「三」は頭の中に残り、その「三」を実生活の中にくみ入れて実行しようという心がけております。

ただ文章に示される偉大な生き言葉や感覚器官である視覚に命じさせましても、宇宙の意識へとつながるパイプはなかなかの障害物が進歩を妨げ、思うようにはかどらないものです。しかし強い信念と忍耐が少しずつでも希望への道へ向かわせてくれるかのようにです。先生が総会の時におっしゃいました「親切」よりも深い言葉「慈悲」は迫力ある言葉でした。いつも痛切に感じますことは、印刷された文章・文字をみて解釈するよりも先生の肉声にある高らかな言葉の響きが心の中で、新たに耳にしたように、感動させられるのです。

GAPニューズレターに記載されている(五十二号、二十一頁「意識と惑星と人間」②)「心の映画法」は、読んでおられる方々の中で実際書かれているとおり実行すればそのようになるのだと思つていても、簡単に接することができない、というより、信じてても身体がついてゆかない・・・と悩まれる方もおられることと思います。私自身ももちろん「心の映画法」は信じていますが、なぜか強い信念が欠けているのか、望みは小さいものへと向けられてしまいがちです。

そこでそのことに対し反省をして、右記を必ず実現させるには「一つのもの」に徹底的に信念をもつことにあるとい聞かせました。欲ばつても良い結果は得られませんでした。ただ「一つのもの」を徹底的に描く際に常に緊張感とか集中を避けようと念頭におきますが、集中と信念との接点に立つたときの除去法、留意点など先生のご助言をいただけたらたいへん幸いに存じます。(千葉県 丹野 広)

あるすばらしい事に気がついたので書いてみます。それは「人間は楽しんで生きねばならない、楽しんで物事を行なわねばならない」ということです。人間は自分が創られた本来の目的に従って生きねばならないというのとはとてもむづかしく思えます。でも私は思うんです。宇宙の英知が人間を創造した時、人間にはソウルマインドしかなかったのではないか。いわゆるエゴといわれるセンスマインドは人間が自分自身をあまやかすために勝手につくり出したので

はないかと。本来なら一体であるべきものを、センスマインドとソウルマインドの二つのものに分裂させて生活する「こんな無理なことが他にあってしょうか!」その上大方の人がセンスマインドに従い、安易な生活を楽しみ、そして偽りの自由を叫び謳歌している・・・。

真の自由を楽しむには人間本来の姿にたち返らなくてはならないのだと思います。それには何よりも先にソウルマインドをより高い英知に近づけつつセンスマインドをそのソウルマインドの位置にまで引き上げねばならない。そうしたらあとは簡単である。一つに合体した魂に従って生きればよいのである。自分では何一つ考える必要はない。ただただ内部の声に注意深く耳をかたむけながら行動するのみである。そうしてそのうち私たちがきつとすばらしい物を見、すばらしい体験をするのだと思います。

以上のことは先生に生まれかわりのことで手紙を出したその晩に床の中で感じたこととで、何だかとてもすばらしい事のように思えて、すぐに書きとめておいたことです。「テレパシー」も「生命の科学」もまだ読んでいない私のことですので、とんでもなくひどい間違いを書いているのかもしれない。その時はどうか親切に正解を教えてください。(大阪府寝屋川市 片岡幸子)

◎ゆずって下さい
GAPニューズレター一号から四十八号までと五十号をどなたか安く売って下さいませんか。
(佐賀市北川副町枝吉七一六 松尾武美)

先日は有意義な月例会に参加でき、深く感謝しています。今年もできる限り参加したいと思っていますので、どうかよろしくお願い致します。

ところで、本誌五十二号で教えていただいた「心の映画法」は私の生活において、すばらしい効果をもたらしております。とても素直で天文に関心を持っている小学生の家庭教師の口を見つめることができたこと、登山をしたとき途中で風邪をひいてしまい、どうなることかと仲間に心配をかけたときに応用したこと、クラブで新しい企画で学園祭に参加したとき、かなり困難な仕事も僕のイメージ通りに結果が実現したこと、等々、書いていたらさきがありまっせん。本当にすばらしい方法を教えて下さったありがとうございます。今後とも応用してゆきたいと思えます。

(千葉県 足立直宏)

寒さもきびしい今日この頃ですが、先生どうお過ごしでしょう。コズモ出版社も年を越したわけです。十二月の「木曜スペース」御覧になったことと思います。よい刺激になって UFO に興味を持つ人がふえればいいなあ、と思ひながら見ていました。恐怖心をそそるような内容もあまりなく、なかなかうまい構成と感しました。アダムのスキー型円盤が何と多く撮られていることでしょう！ なのに未だア氏の写真を問題視し、ベテニ師扱いにする研究家がいるのです。大変残念なことです。テレビの中で宇宙人の写真がかなり出てきました。女性を含む三人の近距離からの写真と、アダム

スキー講演会に来たという、オーソンに似た人の顔の大写真！あれは本物なのでしょう？(本物ではありません。あれは地球人の女性の顔です。―编者)

十一月の総会はせつかく案内状までいただいたの出席できませんで申し訳なく思っています。ますます盛り上がった会になりましたことでしょう。分離のあり得ない宇宙にあって、我々は知覚力を拡張しつつ、一体となっておだやかに冷静な活動を行なわねばなりません。その兄弟姉妹達が一年に一度でも集まって決意と理解を新たにすることは大変有意義なことと思えます。

あと二カ月ほどで入試が始まります。まだ受験生らしくらぬ生活をしていきます。しかしこの高校生活で私は、目には見えぬし、他人には「これだよ」と示すことはできないが、何ものにも変えられない大きなものを得ました。生活上の反省はむろんありますが、後悔の念など全くないです。ア氏の哲学、GAPの活動―まさに「宇宙的」というに価するものと確信します。「宇宙の意識」と現実生活の一体化の手段として学術の勉強にも励まねばと思っています。多忙なことと思いますが、御体には十分気を付けて御活躍されることを心から祈っております。

(仙台市 笠原弘可)

☆私は UFO を見た

私は京都大学の一学生であります。去年同大学の浅井純一氏と知り合って以来(彼が「京都大学 UFO―超心理研究会」を作ったのですが)、今までいっしょに十一月祭や映画会、円盤観測会を行なってきた

した。

ところが今度東京から高坂勝巳氏をまねいて、E・V・デニケン作「未来の記憶」の映画会と「細文人と宇宙人との交流」という彼の作成したスライド上映と講演を行なってもらいました。そして夜になってから(七時三十分より)円盤観測会を行なったのですが、京大の本部構内において一時間半ほど観測していたところ、九時五分から八分にかけて、二回、音もなく飛ぶ光体 UFO を二十数人の人全員が目撃することができました。(一月二十日、日曜日)

私ははっきりしたのを見たのはこれが初めてで、しかもジグザグに飛んだり、方向を変えたりして、たいへん見事に見えたりしなかったです。なおその日の夜「東京と福岡で、UFO目撃があった」というニュースが翌日の朝の朝日テレビ「モーニングジャンボ」で報道されたということでした。

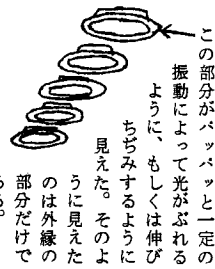
(岐阜県関市 深川 仁)

一九七三年十一月二十日午後七時五十分頃。自宅庭にて。天候快晴(空一面に雲がなく星が出ていた)。目撃継続時間二―三秒。同時目撃者なし。肉眼で観測。

急に星空を見たり、庭に出てみると、テントがおりていたため、やめようかと思ったが、それでもテントごしに見ようと思える。そして心の中でスペースブラザーの事を考えながら二―三分たつたとき、天頂から東へ二十度位の位置で北から南へ向けて飛行する五機の円盤が目撃した。最初頂上付近で光る物を見たとき、ボウリング場のサーチライトかなと思ったが、とっ

さに考えてみるに、雲が一つもない。雲がなければ反射しないし、見えたとしても一条のストとして見えるはずだから違うと思ひ、鳥かなと思つたが、それも違うし―と考えていると円盤だということに気がついた。数をかぞえろと五機見えた。全くの無音で、色は青みがかつた白色もしくは銀白色。しかし光自体は強烈に輝いてはいなかった。そして十年前に目撃したときと同じように機体自体もしくは機体の周囲が回転していたように思えた。なぜなら一定の振動のようなもので光がぶれるように見えただからだ。また、伸びちみするような感じでもあった。高度はわからない。しかし見かけの大きさは、手を空にむけて伸ばして、親指と人さし指とで計って一・五センチメートル位、一円玉位の大きさだった。十年前に目撃したときとくらべてはるかに小さく、また音(風を切るような音)も聞こえなかった。私の印象としては極小型円盤のようであった。目撃する直前に、十一月二十三日の日本 GAP の総会で久保田先生はじめ会員の皆さんと一緒に宇宙機を目撃するという印象を持った、というよりも想念を起こしていた。しかし印象のようだった。速度は速かった。形状ははっきりしなかったが、立体性は感じられなかった。以上ですが、あまりうまく書けません。スケッチは、絵がへたなので当時は描きませんでした。しかし文章だけではわからないと思ひますので、当時をふり返って形状だけを描いてみることにしました。

(井口氏のスケッチ)



この部分がパペットと一定の振動によって光がぶれるように、もしくは伸びがちみするよう見えたと見えた。そのようには外縁の部分は外縁の部分だけである。

右の図のように平べったい感じであった。一列横隊で、一番遠い円盤ははっきりとは見えなかった。なにしろ目撃時間が二、三秒程度であったので、くわしくはわからな。機体の上の方に角ばったドームのようなものが見えたようにも思えた。

(東京 井口才司)

前略—進化した他の惑星の住人は道徳を必要としないとは地球人にとって甚だ憧憬すべきところであり、また理解に苦しむところ。すなわちテレパシーによって会話するようになれば互いの意志疎通はめざましく進歩します。生命が千年を超える程の寿命をもつようになり、また闘争によって容易に傷つくことがなくなったので、恐怖とか拘束とかの観念がなくなり、かくて全体性としての生が宇宙人の若々しさの原因です。地球人の場合は相手に乱暴されるとすぐに生命の支障をきたし、そのため異質のものを見ると恐怖感にとらわれます。それゆえ宇宙人と遭遇すると恐怖感が先に立ち、悪い結果が起こるように考えられます。これというもみんな地球的基盤が原因となっているからです。

地球人は生命ではないところを生命のよ

りどころとしているからで、地球の生活というものは、不足・不満足の状態から生命を守り抜こうとする努力によって成り立っています。

昨夜私は円盤が目撃されたというニュースを友人から聞いて、そのあと酒を買いに行くとき夜道でいまにも宇宙人が現われてくるのじゃないかと思つてこわかった。私は本当は宇宙人に会つてもこわくないことを知っているし、また、いつも男らしくないという評価が与えられているので、そんなときこそ驚嘆するような度胸の良さを示したいと思つている。けれどそれは無理のようだった。ただブドウ酒を持って帰る夜道で、もし小人宇宙人が現われたら、二つある酒のうちサントリーの方を一つやろうか、ハチブドウ酒の方を一つやろうかと思つていたのは事実である。

その一月二十八日の目撃時点で、まず子供が円盤だ円盤だといつて叫んでいた。それは松崎商店街のダイマルという洋品店の子供である。同僚の脇坂はこのときその店のはず前のモリという喫茶店にいたが、この話がわいわいやかましく聞こえてくるので、そのダイマルという店の奥さんに会いに行つた。いうことには「何か知りませんが、子供がしょっちゅう見て、あたしは二、三回見ているんですが、星のよな光がゆっくり飛んで、そしていつも牛原山の頂上付近でパッと消えるんです。その進んで行く方向にチカチカッと火花みたいなのが見えたりする。赤っぽい光で、音がないのが変なんです」というわけだ。モリにはレステルで営業をやっている福本まり子という

女の子が来ていたが、脇坂がこう話すのを聞いて、その夜十一時頃入浴中に何やら変な音が聞こえる。カタカタカタカタという。それでこわくなってバスタオル巻いただけであとは何も着けずに自室に飛んで帰ったそうである。本当にこわかったそうで、自分でもとてもおどろびようだと思つて語つていた。

そのあくる日の一九七四年一月二十九日、今度は私がダイマルに行つて、その物干しから観測していた。するとついに六時三十分、下の娘さんがあやしい光を見つけて指さした。その光はふつと牛原山の中腹わきの夜空に現われ、それからその山かげにかくれるまで五秒ほどだった。大きさは遠くから見る飛行機程度で、この夜はその光点が二つ現われた。一つは白、一つは赤である。そのかくれ方はフワッとされていて飛行機のように速くはない。私はそのとき双眼鏡を携行して、よくその物体を観察できた。左右対称に光っているのに、それが横に移動するといふのは変ではないか。それに娘さんの語つた話がおもしろい。

「いつも牛原山の上をゆっくり飛んで、その真中あたりに来ると光が消えるんです。そしておとと二十七日のときなんかは山の上を一分間もかかって飛んでいました。いつもフワッとした感じで、飛行機じゃないみたい」これはまったく同感で、人間にはものを判断するカンというものがあつた。飛行機、それもジェット機ならばたとえ音が聞こえなくてもそれはわかる。しかるにこの夜の光体はどうも説明のつかないものだった。

そこでここに興味ある問題は、北海道で8ミリにとらえられた円盤のように、円盤は地球に基地を持つかどうかという点です。あの十二月二十五日の木曜スペースシャトルの白眉であるようなその光景はまったく迫力があり、着陸まぎわに夜空をパッと照らす光線—これは基地からの誘導灯なのであろうか。とすれば円盤人と地球人との不可避的な遭遇がいつの日かやってくるかもしれない。だからその点でどのように対処し、相対すべきか、早急に具体案をまとめる必要があります。私はここに日本GAPに対してその対策を講ずるべき旨を提案いたします。(伊豆・堂ヶ島 波多慎一)

お約束しました文化祭の報告書を送ります。テーマ「四次元の世界」日時「昭和四十八年十一月二、三日」会場「千葉県立館山高等学校」責任者「鈴木一宏」

1. 空飛ぶ円盤について — UFOとは? — UFOの正体 — 誤認しやすいもの — UFOの特徴 — UFOは古代にもあつた? — UFOの飛行法 2. 宇宙人 — コンタクト — ジョージ・アダムスキー — セドリック・アリンガム 3. アメリカは宇宙人の存在を確信している! 4. UFOの諸事件 — マンテル大尉事件 — テレオザ夫人の怪事件 — ヒル夫妻事件 — ワナキー事件 — 日本の目撃例 5. 日本列島のナゾ — 比婆山の怪物(ヒバゴン) — ツチノコ — 剣山の大へび 6. 超能力 7. スライド映写 その他 — 省略 (千葉県 鈴木一宏)

昭和四十八年度 日本GAP総会、盛況

会場上空にUFOの編隊が出現！

菊花かおる快晴の十一月二十三日、祭日とあって人出でにぎわう上野公園の東京文化会館で、恒例の昭和四十八年度日本GAP総会が開催された。ここは世界一流オーケストラの演奏会場として有名で環境は抜群である。ただし演奏会用のホールを使用するのではなく、四階の大会議室を会場にあてたのである。

当日は役員一同八時頃から準備にかかったが、みな献身的に活動してスムーズに定刻開会にこぎつけた。最も懸念したのは横尾忠則氏のUFOをモチーフにしたすばらしい作品六点の搬入と陳列であった。なにせ価値の高いものだけに細心の注意を払ったが、幸い支障なく並べることができ、場内の雰囲気盛り上げる事ができた。この運搬にあたっては三浦修が大活躍をやり、それを清水畑博がよく助けた。また場内に展示したUFOパネル写真類も三浦が一手に引き受けて準備した。

定刻十時に司会者の市川宏が熱意のこもった挨拶を行なう。いつもの市川とは変わって見えるが、これはこの日にそなえて精神の高揚訓練をやっていたからだろう。

続いて私の番になる。この日のテーマは「慈悲は法則を完成させる」というモットーの解説であり、格別新奇な情報を伝えるような話ではなかったが、それにもかかわらず場内には真剣の上ない空気がみなぎり、私はすっかり緊張してしまった。約百名のささやかな会合にすぎないが、私自身これほど熱をこめて話したことはない。来会者の高度なレベルの精神波動が場内に充滿しているのを感じていたと思う。この日は九州の果てからも参加された方もあり、私は責任の重大さを感じて、絶えず内部の想念をチェックしながら慎重に話し続けた。その内容の一部は本号別掲記事「慈悲は法則を完成させる」に再録してある。

一時間の昼食休憩後、気象庁気象研究所地震研究部長の諏訪先生の「関東大地震は発生するか」と題する講演に移る。これについて私は多大の関心をもって先生のお言葉に耳をかたむけた。私も関東に住む一人であり、私の運命と重要な関連を帯びているからだ。「コズモ」誌第三号に先生が同じような記事を書いておられるが、総会でもっと詳細な情報や私たちがまだ知らない意外な新事実、新知識

を洩らされるかもしれないと全身を耳にして注意を集中していたのである。期待は外れなかった。「東京にいつ大地震が発生してもおかしくはない」と発言された瞬間の先生の表情は変わっていた。私は先生の真意を読み取ったと思った。

何時頃だったろうか、講演が続いている最中に受付係の志田恵美子が小さな紙片を持って来た。走り書きを見て私は心中でうなり声を上げた。「UFOの大群が上空に現われて大勢の人が見ている」という。「やった！」私は飛び出して一緒に見たい衝動にかられたが、主宰者たる私が大事な講演中に騒ぐわけにはゆかない。はやる心を抑えながら、それでもやがてゆっくりとベランダへ出て行った。

ベランダでは十数名の人達が興奮のさめやらぬ顔でまだ上空を見つめている。もう見えなくなったとだれかが声をかけたので、UFOが消えたことがわかったが、残念な気持は起らない。とにかく大勢の人が見たのだ。会館の掃除係のおばさんが紙巻きタバコを短く切ったような形だったと話しているところを見ると、どうやらUFOは円盤型ではなくて葉巻型の母船群らしい。しかも数十機がV字型の編隊を組んで飛んでいたということだった。当日は風船も多数飛んでいたが、これは一目でそれとわかるUFOである。役員のエリ陽は初めてはっきり見たといっぴろぐ興奮していた。

場内へ引き返してふたたび講演に耳をかたむけ、何かを感じしようとする神経を集中させながらすわって

いると、しばらくして今度は市川が紙片を持って来た。見ると、またUFOが出たという。よし今度は写真に撮ろうとカメラをつかんで立ち上がりかけた。市川が制止して、撮影はやめろという。そこで素手のままベランダに出たら、また大勢の人が空を見上げていた。もう見えなくなるとたれかがいうので、ツイてないなと思いつつ、それでもしばらく空を見つめていた。あんなに大きくはっきりと見たのは初めてだと市川はえらく興奮している。結局二十数名の人が見たらしい。講演中のことなので、会場の後方にいた人だけが飛び出て目撃するという幸運に恵まれたわけだが、休憩時だったからおそらくほとんどの参加者が目撃したことだろう。直接目撃した清水畑博と安田正人の手記が四十五頁から掲載しているので読みたい。

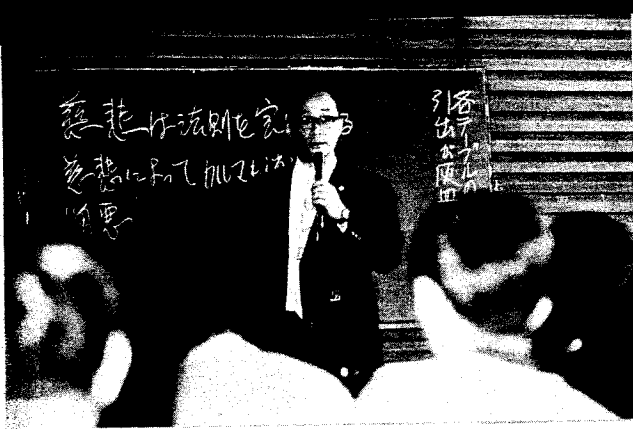
なぜ当日母船の大編隊が上空に出現したのか。しかも都民のだれもが気づかないで、GAPのメンバーが目撃したのか。私にはわからない。ある推測はできるが、それは公言すべきではない。

とにかく、すばらしい会合であった。役員の人達の奉仕的な活動と来会者の方々の熱意ある態度、誠実味のある賑やかな賑訪先生のご講演などにより、この総会が立派に開催できたのである。ご協力いただいた方々に厚く御礼を申し上げる次第である。

久保田八郎記

★ 左より三人目から井上芳人氏、久保田八郎、賑訪先生、市川宏、片京氏





久保田八郎の講演



受付



冥想中の橋本健工学博士(中央)



諏訪彰先生の講演

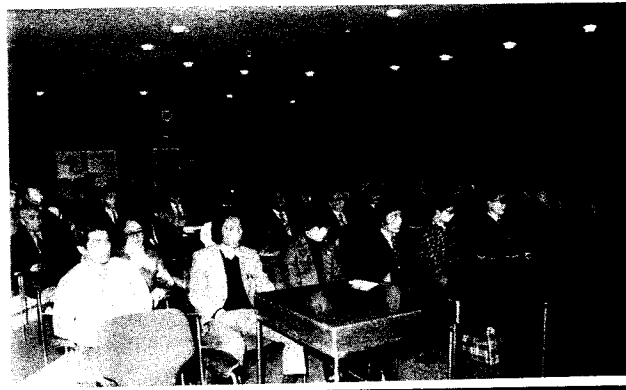


司会者 市川の挨拶

会場風景(A)



会場風景(B)



私は総会々場からUFOを見た!

その1
清水畑 博

その2
安田正人

一九七三年十一月二十三日、その日は好天気に乗
まれたが折り返し悪くスモッグが空一面に広がり、上
野にある東京文化会館から見上げる空は白くにごっ
ていた。

当日は私の所属するUFOと宇宙哲学の研究団体
である日本GAPの一九七三年度総会が東京文化会
館において行なわれ、北は北海道から南は宮崎より
百名近くの熱心な会員が一堂に会した。

私は貧乏クジを引いて役員にさせられたため、雑
用に追われて遠くからはるばるやって来た会員と交
流する暇がなく、会場の外にいたことが多かったが、
これが後になってUFOの大群を目撃するという幸
運をもたらしたから、おもしろいものである。

二時頃、総会の行なわれている四階の大会議室に
隣接するロビーで親しい会員数名とすわっていた。
そばのソファには掃除のおばさん達が二人ほどす
わって何やら世間話に夢中であった。そのうちおば
さん達はロビーに隣接するベランダに歩いて行った。
そこには何人かの会員がいて、下を行きかう大勢の
家族連れやアベックなどを見ていた。となりは上野
動物園であり、勤労感謝の日であったから大変な人
出だったのである。

そのうちベランダにいた会員の一人があわてて、
「出た、出た」と叫んでロビーに走ってきた。
ソファにすわっていた何人かの会員や私はその

その1

あわて方からとっさにUFOだと判断して、我先
にとベランダに飛び出した。

ベランダでは数名の会員と掃除のおばさん達が真
北の方角を指さして、あそこに細長いのが遠ざかっ
ていくと、口々に言いながら騒いでいた。

北の方角とはいえ、まだ二時頃で、空はまぶしく、
しかもスモッグがかかっているのを見にくかったが、
確かに一機の銀色に輝く怪物体が飛んでいた。おお
よそ長軸が短軸の二倍のダ円形であり、真北を直指
してゆっくり飛行していた。仰角は約五十度で、次
第に低くなりつつ小さくなっていった。その小さく
なる割合から、おそらく少しずつ上昇しているもの
と推測した。

何でも最初に見つけたのは二人の参会者で、次に
掃除のおばさん達が出てきてこれを目撃し、ロビー
や会場のうしろにいた人々がこの騒ぎに気づいて次
々と出てきたのである。このUFOは無音で飛んで
いたことになる。

掃除のおばさん達はUFOのことなど全然知らな
いごく平凡な人達で、単に変なのがいるというだけ
で、UFOだとはわからなかったわけである。もち
ろん生まれて初めて見たのである。

始めはタバコを平分に切ったような形で、船体は
灰色をしており、その周囲には銀色に輝くフォース
フィールドが回転ダ円体状にあったとのこと、フ

オースフィールドの濃度はごく薄かったので、中の船体がすけてかなりよく見えたそうである。過去の目撃事件の際には濃密で、さまざまな色に輝いて中の船体が見えない場合がほとんどであることからして、全く貴重な体験をしたことになる。

しかしながら私達が見るためにペランダに出た頃はかなり小さい輝点となっており、単にUFOとしかわからなかったのは至極残念なことであった。

皆が口々に何やら言いながら見ている間にも會員の数は次第にふえ、二十名近くになり、何人かは8ミリやカメラで盛んに撮りまくっていた。たとえ写ったとしても小さなシミかゴーストと変わらない光点にしかならないと思うのだが、どんなものだろう。貴重な数分間すぎ、UFOはスモッグのためか銀色から白色に変化して見えなくなった。目のよい人だけが数人、まだ見るとがんばっていた。

一人が、UFOが急に西の空に移動したと言った。よく見えるとのことなので、皆は数メートル位北東に移動して西の空を見た。風船が十数個空に漂っていたので邪魔だったが、確かにいた。

驚くべきことには、今度は無数の似たような輝点があったのである。方位は西北西で仰角は三十度位であった。

先程のUFOは仰角にして約七十度をほんの数秒間で移動したことになる。おそらくこのUFOは葉巻型か、その類似の型だと皆の意見が一致したので、その長さは最低五百メートルはあり、その輝点のな

す角度が機械で測定しなければならぬほど小さかったため、UFOのスピードは類推できないことはないが、計算しても無意味だと思う。少なくともマッハ8はあっただろう。

さて今度は先程のUFOと同一と思われるUFOの大群がV字編隊を組んでいたのである。葉巻型UFOの編隊というのは本場に珍しいことである。おそらく数ある目撃の中でも初めてのことはあるまいた。小型機の大編隊は高知県南部で年に一度は目撃されるものらしいが、今回の目撃は全く幸運の一語に尽きる。

このUFOのV字編隊は十数機より成り、その周囲にも同一と思われる多くのUFOが自由に飛びながら、いずれも北に向かって飛行していた。そのスピードはきわめてゆっくりで、等速度でまっすぐに飛んでいったと判断した。

数分間その状態を保っていたが、北西の方向に行つたあたりで少しずつ上昇しながらゆっくり編隊を解いて北の空に次第に遠ざかって見えなくなった。

色はどれも白色でダ円形であったが、その理由はわかつたわけではなく、オースフィールドが透明に近い程に希薄なので、近くにいたときは船体の灰色と周囲の銀色が見えたが、遠くなるにつれスモッグと大気中のホコリのために銀色や灰色が白っぽくなり、ついには小さな白色としか見えなくなってしまうのだと思う。この白色の点は非常に明るく輝いていた。

UFOの数ははっきりしないが、私は二十機前後だと思つた。目のいい人など三十数機も数えたそうだが、各人各様の数字をあげるの、二十数機というのが穏当なところだろう。

とにかく空中に漂う多くの風船が邪魔であった。

船体の形は、自分が見て確認したわけではないが、近くにいたときに見た人の話をまとめると、ごく単純な円筒形だったそうだ。ジョージ・アダムスキーが写したといわれる葉巻型UFOの写真にかなり類似しており、両端がやや細くなっていることだけが異なる。他に窓などの目だつた特徴は全く見つからず、灰色のなめらかな外壁をしていたとのことである。

今回のUFO目撃事件は二十数名の二十代から五十代の人の、しかもいずれもUFOに少なからぬ関心を持っていた人々の前で約十分間にわたって発生したという点で、UFOの存在を明確に証明できた非常に意義のある事件であった。何人といえどもこれを否定できないと言っておかねばならない。

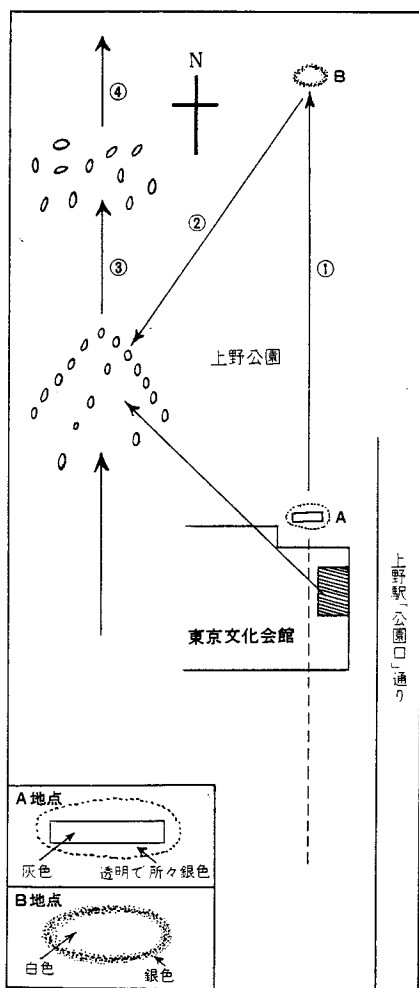
もちろんUFOの目撃は全く何の準備もなしに突然発生するので、正確無比に観察するということは不可能で、今回の場合として例外ではない。

今回の目撃の際のさまたげとなつたのは、まず第一に風船である。当日は東京文化会館の隣りの上野動物園には大変な人出があり、その結果色とりどりの風船が子供の手から離れて空に漂うことになった。特に白色の非常にUFOとまぎらわしい風船が多か

だったので、その区別に苦勞した。UFOは先に述べたような形だが、風船の場合にはよく見ると水滴型になっている。かなり上空にあって点とともれるような風船でもこのことはわかった。また第二には、一つ一つの風船をUFOと区別したとしても、UFOと風船は刻々と位置を変えるので、UFOを教えるときに知らずに風船をも数えてしまったことである。UFOが何十機いようと出現したことは事実であるが、あいまいというのはよろしくない。そこでいちいち教えたわけである。

第三には、目撃したほとんどの人が最初の真上に見たときのUFOを見ていなかったことである。常識的なことだが、一人一人の見方や感じ方はかなり異なるものだし、ましてや初めて見たものを詳細に観察せよといっても明らかに無理な注文である。この欠点を少しでも減らすには、できるだけ多くの人が見る必要がある。人それぞれ何らかの特徴をとらえるであろうし、互いの意見を照らし合わせるにより、かなり正確な実態がわかる。また逆に誤った考えもはっきりさせることができる。この点で他の目撃事件の場合と同じような程度しかわからなかったのは、ま一つ残念である。最初にUFOに気づくのが遅かったといえなくもない。

第四に、会員の一部にUFOを見ている間、色がどうか、三十機いるとか、とにかくいろんなことを大声で口々に言い合っていたことで、観察の際に必要な態度というのを忘れていた人もいた。



私とて例外でなく、UFOというのは何度見てもすばらしいので、つい夢中になってしまった。しかしだれもがUFOについてある程度の知識は持っているの、初めて見た人が多かったにもかかわらず比較的冷静だったのは喜ばしいことだった。

UFOは南の方角から低空で東京文化会館の上空に飛来し、その後次第に高度を上げていったのだが、やはり目の前に大きく現われると冷静にはいかなくなるようだった。

第五に、風船で高空にあるものは色がついておればすぐにUFOでないとわかるのだが、白色のものとはとても判別は不可能であった。UFOはV字型編隊を組んで周囲のUFOとともに一団となって北に

進んでいく、という点に目をつけ、しばらく見ていることにより風船を区別した。風船の場合には気流に流されていくのでフラフラ飛ぶことでわかる。だがこれとて完全とはいえない。双眼鏡があればよかったのだが、あいにくなかったのである。よってUFOと判断した中にも風船であったのがあったはずであり、目撃したときはだれもが風船とUFOの区別に苦勞していた。いろんな考えが出たが、どれも十分とはいえず、白色の風船も太陽の光で反射するので全く困難だった。

ともかくこの事件が絵会に色どりを加えたことは確かだ、記念すべき出来事だったと言える。五時頃まで何人かがペランダに出て空を見上げていた。

その2

昭和四十八年度日本GAP総会の行なわれた十一月二十三日の東京は、スモッグが相変わらず空をおおっていたが、雲は一日中ほとんど見え、快晴の良い天氣に恵まれた休日だった。会場の東京文化会館のまわりの上野公園一帯は休日を楽しむ人々で一日中混雑していた。

総会には全国各地から熱心な会員の方々が百名近くおとずれ、なごやかな雰囲気の中に市川司会者の挨拶や久保田代表の講演と進み、会場内には何かを感じ取ろうとする人々の想念に満たされて、プログラムは午後部である地震研究家の諏訪彰先生の講演に移っていた。

その日会場内の役員をつとめた私は終始一番後の方に立っていたが、諏訪先生の講演が中頃にさしかかった二時すぎ、受付の係をしていた志田さんが、「円盤が見えるそうよ」と言っ外に飛び出したので、「本当かな!」と思って四階のペランダに出してみた。

最初に見つけたのはどうやら円盤の撮影者として知られている千葉県の斎藤氏のようにだった。同氏や他の人達の指さす所を見ると、どれどれ・・・「アッ本当だ!」それは西側の方向、東京湾からおそらく数千メートルはあるだろう上空に、白銀色に輝く小さな円盤の物体が丁度私達の総会会場から一番見やすい所を知っているかのようにペランダの真正面

の空にボンと浮かんでいる。

上野の商店街で買物をした後のサービスの風船が子供達の手をはなれて空に上がっていたが、一倍視力の良い私にはすぐそれが風船などでないことがわかった。あんな高空に風船が滞空しておれるわけがない。一部の人々の騒ぎに会場からカメラや8ミリを持ち出して写した人も二、三いたようだが、遠距離とスモッグにはばまれて思った成果は上がらなかっただろう。

「どこに、どこに」「アッ本当だ」「私にはよく見えない」と会員の方々が騒いでいる中に、会館内の掃除婦のおばさんが「よく見える、というのを聞いて見上げた時にはもつと近くにいてタバコを半分に分けたように、こんなにダ円盤をしていた」と言っ、手の親指と人差指で細長いダ円盤を作ってみせた。円盤に対する知識などほとんどない掃除婦のおばさんがこんな事を語る所からすると、あれは葉巻型の母船かな!。

それから十分ぐらいうると今度はこの白銀色の物体はわれわれの騒ぎを感じ取ったみたい急に方向を変えてみせた。それはほんの一瞬に直線距離にして数キロの北側に動いた。「こっちの右を見てらん、こっちの右を見てらん」とでも言いたさそうなきぶりだ。

そうする内にオヤオヤその後方にUFOの大群が現われた。数は十や二十ではない。もっとある。スモッグにはばまれて正確にはわからないが、ペラン

ダにいた者は歓声を上げた。私も生まれて初めて見る光景だ。白銀色に光る円盤の大群がゆっくりと動いている。それを見て私は水の中の小魚の群れが水の流れに乗ってゆっくり泳いでいる光景を連想した。久保田代表もその時に出てこられて見ておられたが、大群はしばらくしてスモッグの中に消えて行った。斎藤氏は「まぎれもなく円盤の大群です」とあとで私達一部の者に語っていた。氏は円盤が現われるのを始めから感じていたようである。久保田代表も「今までの総会で円盤が現われたのは初めてだ」と語っておられた。

今日の事件は決して偶然ではないと思ふ。ブラザーズはわれわれの事をわれわれが想像する以上に良く知っているんだナ、やっぱし!

閉会になる五時まで、また現われなかつたかと思ふ。ブラザーズはわれわれの事をわれわれが想像する以上に良く知っているんだナ、やっぱし!



日本GAP会員

各地で

UFO資料展を開催

★福岡県飯塚市のUFO展示会

昨年十一月二十六日から四日間、福岡県飯塚市東町の元野木書店画廊でUFO資料展 開催されて大盛況を呈した。これは同県桂川町のGAP会員、建築技術者、内田格男氏(二九)が独力で企画・準備した展示会で、UFO写真と解説をまとめたパネル二十五枚や新聞の切抜きなどを展示したもの。その内容は堂々たるもので、毎日新聞、西日本新聞などが注目して地方版に報道した。

この土地では全く初めての試みとあって、当初内田氏は反響を懸念したが、断固たる決意をもって計画を実施した。これには元野木書店社長のあたたかい理解と協力が大きな助けになったという。毎日新聞はヘリコプターでわざわざ会場上空へ飛来した。内田氏の不屈の精神と大いなる勇氣に敬意を表する次第である。以下は同氏の報告の一部。

「元野木書店でのUFO資料展示会、無事終了致しました。第一回目にしては大変好評だったのではないかと思います。」

十一月十日展示パネルを二、三枚、元野木書店の社長さんに見せると、社長さんみずから後日新聞社へ行きましようとうことで、展示会の始まる二、三日前に毎日新聞と西日本新聞へパネルを持って二

人で行きました。西日本新聞の記者諸君は少し嘲笑的、半分興味本位的な気持で私達を迎えたのではないかと思います。私がパネルを見せると大変真顔になり、まじめに取材してくれました。新聞に載ったのは二日目の二十七日付毎日新聞、二十八日付の西日本新聞です。毎日新聞はこの展示会を大変重要視していたのではないかと思います。というのは二十六日と二十九日の昼頃、二度にわたってヘリコプターで飯塚市内を回り、展示会場の見える所まで飛んで来てしばらく滞空してこちらを見ているような感じがしましたので、双眼鏡で見ますと毎日新聞社のマークと操縦者と双眼鏡でこちらを見ているもう一人の人を見きわめることができました。表看板だけの宣伝なしの第一日目(月曜日)はどうしても朝のうちは少なく十人程度で、昼食後は大変多く夕方六時頃までに五十ないし六十人が見にくらえました。人の言葉もさまざまで、「大変おもしろい」「美しい」「スゴイ」「かっこいい」「よく資料を集めたものだなあ」「円盤本当にあるのね」「あるかもしれないなあ」「私達もやましようよ!」等々が大変多く、反面「本当かなあ」「ポーションを投げて写したみたい」「実際に見なくては信じない」はよいとしても、なかには「あの男ひねくれているなあ。もっと素直になれよ!」と捨てぜりふを残して帰られる人もおられました(中略)

二日目からクチョミがあったのか約半数の人が、「空飛ぶ円盤同乗記」「空飛ぶ円盤の真相」を重点

的に読んでくれました。読まれたすべての人々は大変興奮したのか顔はもちろん手や足まで赤く紅潮されて資料書物を手にとっておられました。なかにはヤクザっぽい人がたまたますべてを読んで、「同乗記」を読まれるあたりから大変まじめな態度になり、全身を赤らめ、太陽系内の宇宙活動に確信を持たれたのか書物を調べ、大変真剣な顔をして帰って行かれました(後略)

★慶応高校文化祭

昨年十一月月上旬の三日間、横浜市日吉の慶応高校で文化祭が開かれたが、期間中同校の宇宙哲学研究会(代表・江島治彦君―二年)からの招きにより編者は十六ミリUFO映画フィルムを持って二日間出張、上映して成果をあげた。なおGAP貸出しのスライドも映写された。

★仙台第二高校でも

九月八、九の両日は宮城県立仙台第二高等学校のCSG(宇宙の魂グループ。代表・笠原弘可君―三年)がGAPのスライド映写会を実施。これまた盛況であった。

以上の他に京都大学の文化祭で京大UFO・超心理研究会(代表・浅井総一君)、九州工業高等学校UFO研究会(代表・浅川和彦君)その他多数の学校でGAPスライドを映写したが詳細は省略する。

UFOと宇宙 ゴズモ

●わが国唯一のUFO専門誌

3月23日全国書店で発売!

隔月刊第5号 ¥330 円85

〒110 東京都台東区秋葉原3の3 アキバビル

振替・東京119478 電話(255)8784(代)

ゴズモ出版社

<口絵写真> 埼玉県狭山市のUFO(カラー)
星美学園付近に出現した円盤?(カラー)
北海道のUFO(カラー)
長野県上田市のUFO(白黒)
東大阪市のライティング・ライト(白黒)

イラスト 木村武清 市川淑一

常陸国際会浜の“異船”は別な惑星から来た宇宙船?

科学評論家 齊藤守弘

日本古来の天空人出現説考 (2) 6

複雑怪奇な点滅光跡の謎 18

自然現象? UFOが描くメッセージ? 近代宇宙旅行協会会長 高梨純一

円盤の中に連れこまれた男 (2) 南山 宏 30

沼地のガスかUFOか? 世にも異常なコンタクト事件

ミシガン州光体目撃事件 アレン・ユートク 37

私のUFO目撃体験記 アマチュア天体観測家による観測実例 清水畑 明・太田博久 42

京大文化祭でUFO資料展 ——興味深いアンケートの回答 47

●<天空と大地>科学シリーズ —— 3

太陽と水で無限の燃料を! エネルギー 48

夢の燃料“水素ガス”を無限にとり出す世界的大発見

東京大学生産技術研究所—本多研究室 渡辺 正

科学トピックス 60

連載ノンフィクション

神々の戦車——(完) エーリッヒ・フォン・デニケン 63

宇宙開発の意義 —— UFOは実在する —— シベリアのナゾの爆発は異星宇宙船の墜突か

編集部より / UFO関係記事募集 77

国内UFO目撃報告 78

読者の声
OPINIONS

82

表紙写真

1973年6月30日、皆既日食調査のため出動した超音速機コンコルド001がアフリカ上空で撮影したUFO。フランス国立科学調査センターが半年間科学的調査を行なって本物のUFOと断定、今年1月31日に国営テレビで放映された。白く光るナゾの物体の直径は200mと推定されている。

日本GAP月例研究会

大阪支部例会

- 1. 日時 毎月第三日曜日。午後一時より五時まで。
- 2. 会場 兵庫県尼崎市 尼崎産業郷土会館
電話〇六(四八八)二三五一 阪神電車「大物(だいもつ)」駅下車。徒歩三分。
- 3. 会費 百円。
- 4. 携行品 テキストとして「空飛ぶ円盤とアダムスキー(高文社刊)」を持参。

東京例会

- 1. 日時 毎月第一日曜日、午後一時より五時まで。ただし一月だけは第二日曜日。
- 2. 会場 上野公園内「東京文化会館」
電話(八二八)二二一一 国電上野駅の「公園口」下車。改札口を出たすぐ前。会館正面に向かって左側の入口から入る。奥のエレベーターから四階へ行くこと。
- 3. 会費 二百円。茶菓が出る。
- 4. 携行品 テキストとして「テレパシー(文久書林刊)」を持参。

日本GAPは左記のとおり東京と大阪支部の二個所で月例研究会を開催して会員の精神的向上と宇宙哲学の探求及びUFOに関する知識の吸収の場を提供しております。特にUFO関係のスライド映写も実施して貴重な資料を公開しています。都府内及び近郊の方はぜひご参加下さい。テレパシーの練習も行なっています。

写真は今年2月の月例会



アダムスキー哲学三大名著 絶賛発売中!

スペースブラザーズから伝えられた宇宙的思惟法と宇宙的な生き方を三部に分けて詳述。GAP会員必携の書。注文は各出版元へ直接どうぞ。

G・アダムスキー 久保田八郎訳

宇宙哲学

¥480 ㊦70

東京都新宿区納戸町33たま出版 振替東京94804

G・アダムスキー 久保田八郎訳

テレパシー

¥350 ㊦70

G・アダムスキー 久保田八郎訳

生命の科学

¥480 ㊦70

出た! アダムスキーの弟子でありコンタクティでもあったフレッド・ステックリングのすばらしい体験記と哲学! 特に幼児教育について重要な示唆を与える。宇宙問題探求者必読の書!

F・ステックリング 久保田八郎訳

なぜ空飛ぶ円盤は来るのか

¥550 ㊦85

東京都文京区白山1-29-12 文久書林 振替東京 2521

本誌旧号

本誌バックナンバー(旧号)は次のものが残っています。発行部数僅少につき残部もわずかしかありません。未入手の方は早目にご注文下さい。

51号・52号 各¥250

㊦70・2冊㊦115・3冊㊦145

オーソン肖像画

ジョージ・アダムスキーが砂漠で最初にコンタクトした金星人は後に「同乗記」でオーソンという名で出てくるが、これをア氏の記憶にもとづいて画家に描かせた肖像画をカラー写真にしたものを日本GAPでは月例研究会で頒布してきた。残部が少々あるので希望者は直接本部宛注文されたい。スペース・ブラザーズとの一体化を図る上で重要な資料となるものである。

◎キャビネ判(11,5×16,5c) ¥300

㊦40

◎名刺判(5,5×8,2c) ¥150

㊦20

上記2点のみは直接日本GAPへご注文を。

